

天皇制と「大東亜戦争」関与の精神構造 ——負い目と擬態の精神史——

Capitalizing on Emperor during “Great Asian Pacific War” and
Its Aftermath

小関 素明*

はじめに一戦後民主主義の桎梏の真因を求めて—

本稿では「大東亜戦争」という呼称を使用する。「大東亜戦争」という呼称は、日米開戦4日後の1941年12月12日の閣議において定められた呼称であり、日本の戦争目的を粉飾するための独善性が色濃く投影されており、学術用語としてはアジア・太平洋戦争という呼称の方が相応しいのはいうまでもない。しかし当時の日本国民のほぼすべてが、アジア・太平洋戦争ではなく、「大東亜戦争」という呼称に表象された理念に魅了されて戦争に同調し、協力した。この点に切り込むことなくして、戦争と国民の関係は解明できない。

そこには、幻想や独善を多分に含みながら、「大東亜」を創造するという「壮意」が含まれていた。この呼称によって、自らを「解放者」、さらには「日本を中心として、その隣接地域を大きく抱き、その世界の上に立派なる社会を建設することが大東亜建設である」¹⁾ というように、国民が自らを「建設者」と自認する感覚が固定化されたことの意味は大きい。歌人斎藤茂吉がいみじくも『大東亜戦争』といふ日本語のひびき大なるこの語感聴け²⁾と歌ったように、この感覚は「大東亜戦争」という「ひびき」、「語感」ととも

* 立命館大学文学部教授

にあった。それをアジア・太平洋戦争という学術用語に置き換えたのでは、戦争に同調した国民の心裏と情念に肉迫しにくい。ゆえに本書では、アジア・太平洋戦争ではなく、あえて「大東亜戦争」という呼称を使用することにする。

「大東亜戦争」は多くの国民の精神を支配した。多くの国民は侵略戦争を支持したのではない。あくまで「大東亜戦争」が標榜した「大義」を支持したのである。しかし、国民のなかで知識人の範疇に属する人々の多くは、「大東亜戦争」が中国への侵略戦争の行き詰まりの末にのめり込んだ無謀な戦争であり、それがまとった「大義」に虚偽の臭いを嗅ぎ取っていた。にもかかわらず、知識人の多くは熱狂的にそれを支持した。否むしろ多くの知識人や芸術家たちはその「大義」をさらに道義化、美化することに協力し、自分達が支持するに恥ずかしくない戦争へと再創造することに狂奔した。そして戦後は、ある者は沈黙し、ある者はその後ろめたさを隠蔽するために居直り、ある者はそれが避け得ない強要に屈せざるを得なかった結果であったことを強調した。

たしかに、彼らの言う通り、その大部分が避け得ない強要に屈せざるを得なかった結果であることは否定できない。しかし、そのことに居直り、さらには「大東亜戦争」の「大義」の虚偽性を批判的に検証しようとする試みを冷笑したり、痛罵するのであれば、もはやそれは、権力によって散布された「大義」に靡いて侵略戦争を支持したことよりもたちの悪い姿勢といわざるを得ない。一方で、それを頭ごなしに断罪し、戦争を美化した知識人たちの言説がいかに虚偽であったかを暴き立てることだけに終始する作業からは、戦争への真の内省を深めることはできない。

本稿の目的は、思想信条や言論の自由が大きく制約された戦時下において戦争を美化した知識人たちを一方的に糾弾することでも、彼らの主観的壮意や苦難の境遇に共感することでもなく、さらにはわずかに抵抗した箇所と同調した箇所を腑分けして彼らの良心の度合いや強度を吟味してみせること

でもない。

重要なことは、彼らの精神を支配していたものは何であったのかを、戦前日本にとっての「大東亜戦争」の性格と天皇制の特性との関係から明らかにすることにある。管見のかぎり、旧来の研究でこの点を本格的に掘り下げたものは存在しない。

筆者は、この取り組みを欠いたままで、戦後民主主義の推進はありえないと考えている。

序章—問題の所在—

日米開戦に端を発する「大東亜戦争」が、従前の戦争とは比較にならない規模で日本の国民（当時の呼称は天皇との関連でいえば「臣民」だが、本書では特別な場合をのぞき、知識人も一般の国民も含めて国民と記す。特に一般の国民を知識人と区別して論じたい場合は、一般民衆と記す）に影響を及ぼしたことはいうまでもない。それは単に国民に及ぼした犠牲の大きさだけでなく、従前の戦争と比較して国民の自我と心情を特異な形で揺さぶり、そして一筋縄では解きようのない影響を国民と日本社会に残した。

それとの関連で特に枢要な問題が近代天皇制との関係である。ただし、その関係は屈曲している。詳しくは以下の行論で明らかにするが、まず日米開戦は天皇の意向（詔書）という形をとって宣告され、それに踏み切った「天皇の意向」を多くの文化人や大部分の国民は熱狂をもって受け容れたことに注目しなければならない。近代日本において、天皇と国民の「意向」がもっとも通じ合ったのは、大日本帝国を破滅に追い込んだこの開戦の決定をめぐってであった。「開戦の詔書」という形で開戦決定が公示された瞬間は、近代日本において天皇の国民に対する存在感が最大限に高まった瞬間であった。それは大東亜戦争に賭ける国民の「期待」を天皇が受けとめたと実感されたがゆえであった。

ところが、そうした熱狂が続いたのは緒戦において日本軍の「戦果」が華々しく報じられていた時点までであり、戦況が不利になるにともなってそうした熱狂は鎮静化し、戦争の「意義」に対する疑念が潜伏しはじめた。ではそうしたなかで、「大東亜戦争」と天皇制の関係はどのような推移をたどるのか。

そうした疑念を封じるために試みられたのが、戦争目的を「普遍化」し、それが「大義」である所以を挙証することであった。そこには、戦争目的の「普遍化」に向けて連合国側が指針とした大西洋憲章の理念に対抗するという思惑も込められていた。「近代の超克」論は、そうした試みを代表するものである。

そこにおいては、直前まで国民を熱狂させた「天皇の意向」は前面に打ち出されていない。それはいくら「大御心」や「御稜威」を謳おうとも、「天皇の意向」をもって大西洋憲章に勝る戦争目的の「普遍化」をはかることには根本的限界があったためである。では天皇の存在はまったく消去されたのかといえば、もちろんそうではない。「天皇の意向」にかわって活用されたのが天皇の存在原理であった。

「大東亜戦争」を合理化するためには、戦争目的の「普遍性」を謳うだけでなく、そうした「普遍的」な目的を担う戦争を日本が主導することの「必然性」を挙証する必要があった。つまり、大日本帝国こそその「必然」を背負うにたる特立的国家であることを挙証する必要があった。その「論拠」として持ち出されたのが、東洋の辺隅にありながら、近代化をとげた大日本帝国の政治地政学的な特殊性と、その領土拡張の基本理念は西欧国家の貪婪な帝国主義的領土獲得指向とは異質の「寛容精神」と「清明心」に立脚しているという「論拠」であった。そしてこの西欧国家とは異質の領域支配の「寛容性」を表象するものが、「八紘一宇」という言葉に奉戴された天皇の国土統治理念であった。それは「天皇の意向」ではなく、天皇の存在原理として標榜されてきた理念であった。「天皇の意向」は天皇の時々の天皇の個人的

意思ではなく、時々の天皇を根拠づけているその存在原理の表白にすぎない。ここにおいて、天皇はもはやその「意思」を奉戴される対象ではなく、その存在原理を利用される対象になりはてている。

もちろん「大東亜戦争」の期間中において、「天皇の意向」が遵奉される機会が完全に消滅したわけではない。それが最大の「効力」を発揮したのは終戦の決定であった。天皇の宣告によって開戦が告示された「大東亜戦争」は、再び「天皇の意向」を持ち出す（「天皇の意向」という形式を踏む）以外に終戦を宣言する方策はなかった。

3年8カ月に及んだ戦争に倦み、戦禍に苛まれた多くの国民は内心では終戦を望んでいた。しかし「一億総決戦」の呼号のなかで、それら国民は終戦への願望を表明することはできなかった。そうした国民の願望が鬱積しながら出口を見出せないなかで、天皇が玉音放送という形で終戦の「意向」を表明したことは、国民にとって大きな救いであった。これに助けられて国民は、天皇の「聖断」に苦渋の思いを押し殺して付き随うという擬態をとることによって、敗北主義者の誹りを避けながら、自らの胸中に秘めた本懐を遂げることができた³⁾。

これは国民にとって二重の「後ろめたさ」の隠蔽であった。第一に政府の呼号する戦争の「大義」に雷同して開戦を熱狂的に支持したにもかかわらず、最終的には降伏という形で敗戦を受け容れたという屈辱感を「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ存リ」（「大東亜戦争終結ニ関スル詔書」）という天皇の言辞によって癒やしてもらったという「後ろめたさ」である。第二にはそうした「本音」をすら天皇に語らせることによって本懐を遂げ、その代償として国民に惨禍を与えた開戦を宣告した天皇の責任を不問に付したという「後ろめたさ」である。

ここには、国民との関係における天皇制の本質がいかに露見している。すなわち、お互いの「負い目」を赦し合うということによって、その隠蔽をはかるという負の共依存関係がこれである。正確に言えば、国民にとっ

での天皇（制）とは、自己の虚栄心を直裁に仮託できるとともに、自己の負い目を銜いのない清冽な言辞に置き換えることによって緩和してくれる存在に他ならなかった。

そして、そうした天皇に対する後ろめたさの意識を解消するために天皇を平和の象徴として掲揚してみせたのが敗戦後の象徴天皇制であり、象徴天皇制とは、まさにそうした国民相互の負の連帯意識に支えられた「国民統合のシンボル」に他ならない。そしてそうした象徴天皇制の助産婦であり、そこに含まれていた天皇と国民の淫靡な相関関係を摘発せずに許容してくれたかつての敵国米国の価値観を奉じる擬態の上に成り立っているのが親米主義であった。

大東亜戦争の推移の過程においては、こうした近代天皇制の本質が肥大化した。同時にそこには、近代天皇制の機能的限界が掩いようもない露呈した。にもかかわらず従前の近代天皇制研究、ないし十五年戦争史研究において、これらの点を掘り下げて解明した研究は、管見のかぎり、存在しない。それは準戦時下から戦時下における天皇制の機能は、軍事政策の推進ないし弾圧体制のシンボルであることは自明であり、こと改めてそれ自身の機能を解析する意義に関心が向きにくかったためではなかろうか。本稿はこの点を解き明かすための試みに他ならない。

本論に入るに際して、本稿で取り扱う史料にどう向き合うべきかについて、一言しておきたい。第一に本稿では多くの日記類と雑誌に掲載された文化人や政府当局者の論稿を戦争に関する国民意識を分析する素材として取り扱う。日記は、一部の例外をのぞいて、基本的に公刊が予定されたものではないため、ほぼ直裁に記述者の思念や心情が記されているものが多い。他方公刊された論稿は、特に日米開戦下においては検閲を想定し、当局の意に逆らうことは記されていない。ではそれら論稿は検討するに値する史料価値がないかといえば、必ずしもそうではない。

それらには基本的には反軍的・反戦的なことは記されていないが、国民の

大半が反軍的・反戦的思いを抱いていない状況下にあつては、戦意昂揚を企図したそれら論稿の記述には、国民の思いと共振する部分が多く含まれるとともに、ときに国民（国内）の機運の特質が明晰化され、さらにはそれが含む問題点への要所をえた切り込みが見られるのである。それは戦時政策推進の必要上、克服すべき問題点をあぶり出し、早急に是正することが切迫した課題であったために他ならない。抱懐する思いに粉飾を加えずに直截に記載する傾向が強い反面、断片的な記述にとどまりがちで情報量は比較的少ない日記類と、比較的まとまった記述が見られるこれら諸論稿を重ね合わせ、それらを相互に比較検証しながら補正していくことによって「大東亜戦争」に関与していく国民の精神史の輪郭が、一定の立体性をもって描けるのではないかと筆者は考えている。

次いで使用する史料は文学作品、特に詩である。大東亜戦争下においてはもはや反戦的な内容の文学作品を發表することはほぼ不可能であり、戦争翼賛的な内容を含んだ戦争文学が大量に創作された。このうち小説に関してはいわゆる従軍作家、南方作家として徴用され戦地に赴いた作家が創作したルポルタージュに的要素の強いものも存在する。平時においてはすぐれた文学作品を創作した作家たちも戦争文学の創作に従事したが、これらは文学的価値からいえば、一部のものをのぞいて、総じて低く評価されている。小説を中心とした散文のほかに、いわゆる愛国詩、戦争詩といわれるものも量産された。このうち本稿では詩を重点的に取り扱う。

なぜ詩なのか。それは詩の特質ともいうべき言葉の精妙さと関連している。短縮した表現で人間の内面世界を表さなければならない詩は、散文以上に言葉の濃度と旋律に重きが置かれる。読み手は、濃密な言葉と旋律に載せられた表現者の内面世界を解凍し、それに共感、心服したり、覚醒させられたりする。それが読み手に影響を与えるためには、詩は読み手にも共通する思いを掬い取るとともに、それを明晰化し、さらには一步先んじていることが必要である。

戦時下においては、詩人たちにも戦争を美化し、戦意を鼓舞する役割が求められた。そうした要請をうけて、多くの詩人が数多くの戦争賛美の愛国詩や戦争詩を創作した⁴⁾。多くの詩人たちは一般の民衆の思いを背景に、その思いを言葉によって掬い取って明晰化し、壮麗な言葉によって一步先んじてその思いを美化し、その思いを託された戦争を観念的に再創造してみせた。圧縮された言葉でなされる戦争賛美には、プロパガンダ的な激越な表現のものも多く含むとはいえ、散文よりも時に荘厳に響くものも含まれている。双方を含め、戦争詩は多くの国民の戦争に対する思いを実態以上に鮮明に表現しつつ、それを矯激的になしたことに於いて煽動したというべきであろう。

しかし戦争詩の制作者である詩人たちすべてが、盲目的な戦争礼賛者であったわけではない。彼らは内面に葛藤を抱えながら、戦争詩の創作に従事した。戦争への明示的な反対は見られないが、戦争が自身や一般の国民にどのような影響を残すのか、それを踏まえた上で表現者として戦争をどう受けとめ、どう対峙すべきなのか、拭えない煩悶に囚われていた。

自身の心象を、説明するのではなく圧縮した言葉に象徴化し、読み手に伝達することを命題とする詩は、自身の内面世界と象徴表現との間に散文以上に強い緊迫感を孕む。しかも戦争賛美という課題が強要されている戦時下においては、この緊迫感はさらに増す。戦時下とは、こうした表現芸術が抱える普遍的な問題点が極度に焦点化されてしまう時代であった。

しかも同時に人間が巨大な圧力に否応なく曝される戦時下においては、詩人も国民、さらには一個の人間として戦争に対峙せざるを得ない。その結果、表現者としての自意識のなかに一個の人間としての生感覚と国民としての義務感が鋭く食い込んでくるのである。表現者としての詩人の葛藤と煩悶は極限まで高まらざるを得ない。つねに自己の外にある対象と内なる自己との葛藤を引き受けるのが表現者のあるべき姿であるとすれば、「大東亜戦争」下における幾人かの詩人の煩悶は、表現者の極限の姿ともいえよう。

こうした表現者の極限の姿は、「大東亜戦争」が近代日本におよぼした精

神的影響の震度と深さを浮き彫りにするのである。

本稿が詩を分析対象として重視する理由はここにある。

I . 「大東亜戦争」の翻弄

1. 開戦の衝撃と変貌する詩人たち

「大東亜戦争」は、総力戦という名の通り、それまでの戦争とは比較にならないレベルで国民を巻き込み、その傷跡は敗戦後にも大きな影響を残した。にもかかわらず、「大東亜戦争」に関与した当時の国民の精神構造に関しては、掘り下げた分析がなされてきたとはいえない。それは「大東亜戦争」下においては国民に有無をいわせない総動員体制がしかれ、国民の思想信条や表現活動への統制・弾圧が格段に強化され、戦争への自由な思いを吐露する条件が皆無といっていいほど制約されていたために、戦争への関与を国民の内発的姿勢として検討する余地がほとんどないと見なされてきたためであろう。たしかに日米開戦以降は、思想統制が格段に強化され、政府批判や反戦意識を表明したものは社会からほとんど一掃されたといっても過言ではない。

しかし、そうした強制的な総動員体制のもとであっても、戦争目的と戦時政策に受動的に包摂されたのか、それら主体的、能動的に支持したのかは厳密に検証しなければならない。なぜなら、この両者の間の差は、当然敗戦後の国民の戦争責任の自覚の有無の差に反映するからである。

ただこの作業には相当な困難がともなう。それは、戦争批判が客観的に封じられているだけでなく、戦争賛歌が義務として要請されている戦時下の言説は、一見そこに有意味な差は認めにくいと思われるほど、一様に戦争賛美や戦争美化に染まっているからである。したがって、一見ほとんど差が認められない戦争賛美の論述のなかにその強度やニュアンスの相違、さらには支持の根拠などを注意深く探り当てることによってそこに戦争支持の主体性

や能動性の性格と深度を探知し、明晰化するという作業が求められる。

「大東亜戦争」以後は、それ以前と比較して戦争支持の規模と強度が格段に増大した。もちろん、日米開戦以前の段階においても盧溝橋事変以後は事実上戦争批判を公言することは困難になっており、総動員体制の強化とともに諸政党は解党し、国策批判の母体になる勢力はほとんど消滅していた。しかし未だ日米開戦以前においては、少なくとも中国での軍事行動の意味や正当性に対する懐疑が知識人や文化人たち個人の間にも明確に存在していた。それは戦争反対や戦争に対する懐疑を表明することはできなくとも、依然積極的な戦争賛美の論述や作品を公表しない知識人や文化人が存在したという事実によって明らかである。

だが日米開戦とともに、そうした状況は一変した。それを端的に示すのが、それまで日中戦争に協賛はしながらも、積極的な戦争賛美の作品や論説を公表しなかった文化人や知識人たちまでもが露骨な戦争美化の作品や論述を公表しはじめたという事実である。

文学作品のなかで、特に詩においては、この傾向が顕著に見られる。例えば高村光太郎（1883～1956）は、すでに日中戦争開始の段階で日本の軍事行動の「歴史的意義」を認め、以下のように戦争に協賛する詩を創作していた。

未曾有の時 高村光太郎

未曾有の時は沈黙のうちに迫る。
 一切をかけて死んで生きる時だ。
 さういふ時がもう其處に来ている。
 迫り来るものは假借せず、
 悠久の物理に無益の表情はない。
 吾が事なほ中道にあり、
 世の富未だ必ずしも餓孚を絶つに至らず、

人みな食へないままに食ひ
一寸先きの闇を衝いて生きる日、
枚を銜んで迫り来るものは四邊に満ちる。
既に余が彫蟲の技は余を養はず、
心をととのへて獨り坐れば
又年が暮れて歴日はあらためられる。
巷に子供ら聲をあげて遊びたはむれ、
冬の日は穩かにあたたかく霜をくづし
紫陽花の葉は凋み垂れて風雅の陣を張り、
雲雀はチチと鳴いて窓を覗きこむ。
すべて人事を超えて窮まる處を知らない。
さればしづかに強くその時を邀へよう。
一切の始末を終へて平然と来るを待たう。
悉く傾けつくして裸とならう。
おもむろに迫る未曾有の時
むしろあの冬空の透徹の美に身を洗はう。
清らかに起たう⁵⁾。

この詩は、対戦国への敵愾心を露わにした戦争詩とはいいがたい。しかし「1937年12月19日作」と記されていることから、国民政府の首都南京陥落（12月13日）の報が日本に届いたのとほぼ同時期に創作されたものと見なして間違いがない。しかも「前書き」に「（前略）北支事変は支那事変に拡大され、日本は英米という大きな力に遠慮しながら不利な戦いを戦ひ、しかも抗日支那の夢を破らんとして甚大な戦果を上げた。未だ戦いになれざる国民の間にも報告の熱意は烈しく、困苦に対する覚悟も出来そうになった」⁶⁾と記されていることからみて、明確に日中戦争時の日本側の軍事行動を鼓舞する意を含んだものである。文中の「抗日支那の夢を破らんとして甚大な戦果を上げ

た」というのは、首都南京陥落を指すと見なして間違いないであろう。

そうした観点から見たとき、使用されている「枚を銜んで（ばいをふくんで）迫り来るものは四邊に満ちる」というやや難解な表現の含意は、「密かに攻撃の機会をうかがっている敵は周囲に満ちている」というほどのニュアンスかとも思われる。ただそれもそのすぐ後に「既に余が彫蟲の技は余を養はず」（「もはや小手先の芸術の技量をもてしては、自分自身をも満足させることはできない」というほどの意味か）というフレーズが続くので、敵に囲まれているのは高村自身かとも思わせる内容になっている。つまりこの詩は、国家を包囲する外敵の脅威を自意識も含め自身を悩ます内敵として詠むことによって戦争の危機を自身の内面的な危機としてとらえ返している点に特色があるといえよう。形式的にはあくまで、自身の芸術的境地を揺るがすものへの身構えと新境への眺望に力点があり、戦争の危機はあくまでそれと共振する外部的変動とし意味づけられているにすぎない。そうした意味において、直接の排外色は薄い。

ところが、日米開戦の直後に詠まれた以下の二つの詩は、これとは全く様相を異にする。

鮮明な冬 高村光太郎

この世は一新せられた。
 黒船以来の総決算の時が来た。
 民族の育ちがそれを可能にした。
 長い間こづき廻されながら、
 なめられながら、しぼられながら、
 仮装舞踏会まであえてしながら、
 彼等に学び得るかぎりを学び、
 彼等の力を隅から隅まで測量し、

彼等のえげつなさを満喫したのだ。
今こそ古しへにかへり、
源にさかのぼり、
一瀉千里の奔流となり得る日が来た。
われら民族の此世に在るいはれが
はじめて人の目に形となるのだ。
鴨が啼いている、冬である。
山茶花が散っている、冬である。
だが昨日は遠い昔あり、
天然までが我にかへった鮮明な冬である⁷⁾。

彼等を撃つ 高村光太郎
大詔ひとたび出でて天つ日のごとし
見よ、一億の民おもて輝きこころ躍る。
雲破れて路ひらけ、
萬里のきみは眼前にあり。
大敵の所在つひに発かれ、
わが向ふところ今や決然として定まる。

(下略)⁸⁾

この二詩において日米開戦の「意義」は自身の内部的危機との相関性を離れ、あくまで直接的に国家にとっての危機として捉えられている。そこでの自己は、国家の危機に直情的に感応しているにすぎない。くわしくは後述するが、そこにある感覚は「大詔」によって敵の所在が明確に公示されたことに対する「覚悟」と、それまで押し殺してきた応報感情を英米に向けることに憚りがいらなくなったことによる「爽快感」である。ここにおいては一転して、排外感情はむしろ前提ですらある。

高村光太郎にとって日中戦争は「戦うべき戦争」であり、それを詩人らしい独自の美感をもって受けとめた。しかしそこには、露骨な戦争賛歌を謳うことに対する逡巡が含まれていた。ところが、日米開戦時の詩は戦争に対する疑問や違和感は払拭され、国家や民族の危機への直接的な自己同化の賛歌に変貌した。この傾向は戦局が進展するにともなって、鮮明になっていった。このような高村光太郎と同様の変化を見せる詩人は、ほかにも多く存在した。詳述する余裕はないが、野口米次郎、中勘助、佐藤春夫などはほぼ同じ部類に含められる⁹⁾。

日米開戦の影響はこれにとどまらない。高村らとは異なって、それまで戦争に対する疑問や懐疑から積極的に戦争を賛美する詩を創作することに躊躇していた詩人までもが戦争賛美の詩を公表しはじめたことが、むしろその衝撃の大きさを物語る。例えば、日中戦争賛美の詩作を行っていなかった三好達治(1900～1964)までもが、かなり熱烈な戦争賛歌の詩を公表しはじめたことはその好例である。例示すべき詩に事欠かないが、例えば三好の詩集『捷報いたる』(東京スタイル社、1942年7月刊行)所載の「捷報臻る」は三好の変容を示して余りあろう。

捷報臻る 三好達治
 捷報いたる
 捷報いたる
 冬まだき空玲瓏と
 かげりなき大和島根に
 捷報いたる
 眞珠灣頭に米艦くつがえり
 馬來沖合に英艦覆滅せり
 東亜百歳の賊
 ああ紅毛碧眼の賊商ら

何ぞ汝らの物慾と恫喝との逞しくして
何ぞ汝らの艦鐘の他愛もなく脆弱なるや
而して明日香港落ち
而して明後日フィリピンは降らん
シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるなり
ああ東亜百歳の蠹毒
皺だみ腰くぐまれる老賊ら
已にして汝らの巨砲と城塞とのものものしきも
空し
そは汝らが手だれの稼業の
ゆすりかたりを終ひに支へざらんとせるなり
かくて東半球の海の上に
我らの聖理想圏は夜明け
黎明のすずしき微風は動かんとせり¹⁰⁾。

もはや詩意は解説するまでもないであろう。アメリカとイギリスが「東亜百歳の賊」、「紅毛碧眼の賊商」、「皺だみ腰くぐまれる老賊」と痛罵されていることを見れば足る。『捷報いたる』にはこの外にも「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」、「汝愚かなる傀儡よ」¹¹⁾など、これと同種の戦争詩が満載されている。「アメリカ太平洋艦隊は全滅せり」は読んで字のごとく、この時点でのアメリカの海軍の戦闘能力の失墜を詠んだものであるが、「汝愚かなる傀儡よ」は中国を「傀儡」にたとえ、「すでに汝の背後に傀儡師（くぐつまわし）はなし」、すなわち頼みとする英米は日本が大きな打撃を与えたがゆえに存在しないとして、以後の国民党による抵抗の見通しが絶たれたことを「新しき大亜細亜」の出現として言祝ぐ内容となっている。さらに言えば、そうした状況変化を理解せず抵抗を続ける「支那」の「愚昧」を強意的に取り上げ、それを憫笑している。

中国に対する軍事行動に疑念を抱いていた三好がこうした言辞を発していることは、日米開戦が中国への視線をも変えてしまう影響力を与えたことを端的に示すものといえよう。英米に挑み、緒戦においてその軍事力に大きなダメージを与える戦果を得たことは、そうした日本になお抵抗を止めない中国を劣国視する視線をも決定づけたのである。

「大東亜戦争」が当時の一般の民衆や知識人、文化人に与えた絶大な影響力はこうした二重の意味において理解しなければならない。付言すれば、この三好の和綴の詩集『捷報いたる』の奥付には初版の発行部数が一万部と記されていることから、この種の詩集にしては例外的な大量部数の発行であり、かなり広汎に読まれたことが知れる。『干戈永言』（青磁社、1945年）などとあわせてかなりの程度国民の「壮意」を振起したものと見なせよう。

三好ら戦争詩を大量生産した詩人たちすべてが、何のわだかまりもなく衷心から「大東亜戦争」を熱烈に支持したのかどうかはそれ自身が重要な検討課題である。が、少なくとも三好は、日中戦争に対しては見せなかったような好戦的で高踏的な姿勢を、対英米開戦とともに両国に対して振り向けたことは間違いがない。これと同等の例として、例えば太宰治も日記形式の小説「十二月八日」で、作中の主人公（主婦）に「滅茶苦茶にぶん殴りたい。支那を相手のときは、まるで気持が違うのだ」¹²⁾と語らせていることに注目してよい。太宰のこの小説が掲載されたのが総合婦人雑誌『婦人公論』であることから考えて、婦人の間にもこうした類いの痛憤が、かなりの共有される環境にあったことは間違いなからう。

2. 「開戦の詔書」の作用—昂揚感の国民的広がり—

では、こうした詩人たちの態度変化を促した要因とは何なのであろうか。それは、対米戦争を主軸にした「大東亜戦争」の特性の作用によるところが大きい。それとともに、本論中で述べるように、そこには国民に対する天皇制の機能が大きく作用していた。

これらの点を明らかにするためには、日米開戦の報がもたらされた直後に多くの一般民衆や知識人たちが抱いた感慨が手がかりになる。

日米開戦直後に公刊された『中央公論』1942年1月号の「巻頭言」は「米英に対する戦争が宣言せられた時、国民はからりとした気持ちになった。それまでもやもやしていたのが、きれいに晴れたといふ気持であった」¹³⁾と当時の国内の機運を概観している。多くの国民が開戦によって逡巡が払拭されたようなある種の「爽快感」を感じたというこの観測は、多くの国民に共通する感慨を的確に概観しているといってよい。この「爽快感」は昂揚感と交錯していた。その点を、1941年12月8日未明に開始された日本軍による真珠湾攻撃とその直後の緒戦における「戦果」に対する多くの文学者、知識人、さらにはそれらの目に映った一般の民衆の反応から検証してみたい。当時の彼らの日記や論述から以下に列挙するような彼らの反応や心境が確認できる。

河上徹太郎（文芸評論家 1902～1980）

- ・混沌暗澹たる平和は、戦争の純一さに比べて、何と濁った、不快なものであるか！

今や国民は、ものを見る眼の純一さを獲得したといっている。（中略）生きること、見ること、働くこと、すべてが一人の人間の中で一つになり、更にこの一つが一億の国民を通じて一つであるという状態。こんな望ましい日が、こんなに率直にやって来ようとは、ついぞ想像して見なかった。今や我々文学者にとって、国民文学とは何ぞや、などという議論はいらぬ¹⁴⁾。

- ・今こそ全文化を目的意識と観念的規定の室から出して、凜然たる外気に当て、自然のままに生きてゆくものだけを生育せしめるよう、純粹化し、淘汰せねばならぬ。

かういう時期にこそ、文学には「文」の領域があることをはっきり認識することが出来る訳だ。今のように「軍」や「政治」に追従していたのから去って、明確に己が本然の使命の下に、今日の栄えある国民的試練の時を自力で生きてゆかなければならぬ¹⁵⁾。

- ・時に平生纏まった論文を書いている人が、思わず人間的な尻尾を出しているの、そういう楽屋落ちの興味もあるのだった。(中略) 文芸の集中物「戦いの意志」を通読しても、各人各説でしかもすべて私の同情措く能はざるものであるが、結局之等の言葉が一億国民のしかも同音の合唱であってみれば、その中で一声際立った独唱の歌声なんて聴こえる筈のものではないのである¹⁶⁾。

坂口安吾 (小説家 1906 ~ 1956)

涙が流れた。言葉のいらぬ時が来た¹⁷⁾。

獅子文六 (小説家・演出家 1893 ~ 1969)

ふと、自分は、ラジオを聴く前と、別人になっているような気がした。(中略) 一間も二間もある濠を、一気に跳び越えたような気持がした¹⁸⁾。

高村光太郎 (彫刻家・詩人 1883 ~ 1956)

時計の針が十一時半を過ぎた頃、議場の方で何かアナウンスのような声が聞えるので、はっと我に返って議場の入り口に行った。丁度詔勅が捧読されはじめたところであった。かなりの人が皆立って首をたれてそれに聴き入っていた。思わずそこに釘づけになって私も床を見つめた。聴きゆくうちにおのずから身うちがしまり、いつのまにか眼鏡が曇って来た。私はそのままいた。捧読が終わると皆目がさめたようにして急に歩きはじめた。私も緊張して控室に戻り、もとの椅子に座して、ゆっ

くり、しかし強くこの宣戦布告の詔を頭の中で繰り返かえした。頭の中が透き通るような気がした。

世界は一新せられた。時代はたった今大きく区切られた。昨日は遠い昔のようである。現在そのものは高められ確然たる軌道に乗り、純一深遠な意味を帯び、光を発し、いくらでもゆけるものとなった。

この刻々の瞬間こそ後の世から見れば歴史的転換の急曲線を描いている時間だと思った。時間の重量を感じた。(中略) ひるがえってこの捧読を聴かせたまうた時の陛下のみこころを恐察し奉った刹那、胸がこみ上げて来て我にもあらず涙が流れた¹⁹⁾。

竹内好 (中国文学者 1910～1977)

十二月八日、宣戦の大詔が下った日、日本国民の決意は一つに燃えた。爽やかな気持ちであった。これで安心と誰もが思ひ、口をむすんで歩き、親しげな眼ざしで同胞を眺めあった。口に出して云ふことは何もなかった。建国の歴史が一瞬に去来し、それは説明を待つまでもない自明なことであった。

何びとが、事態のこのような展開を予期したろう。戦争はあくまで避くべしと、その直前まで信じていた。戦争はみじめであるとか考へなかった。実は、その考へ方のほうがみじめだったのである。卑屈、固陋、囚はれていたのである。戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。一切が明らかとなった。天高く、光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。ここに道があったかとはじめて大覚一番、願れば昨日の鬱情は既に跡形もない²⁰⁾。

太宰治 (小説家 1909～1948)

それを、じっと聞いているうちに、私の人間は変わってしまった。強い光線を受けて、からだが透明になるような感じ、あるいは、聖霊の息

吹きを受けて、つめたい花びらを胸の中に宿したような気持。日本も、けさから、ちがう日本になったのだ²¹⁾。

東畑精一（農業経済学者 1899～1983）

十二月八日。かしこくも御詔書を賜り、「茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス」との御聖断を戴いたのである。われわれの一切の思考と一切の行動を挙げて悉くが其の目標、方向に於て此の瞬間に確定した。一億の国民が純一無二の大目的に向かって突進することが定まったのである。戦に於ては断じて勝たなければならない、戦いに際しては最後まで勝つものこそ勝つ—これが私共の信念でなくて何であろう。（中略）今や一切が抜本的、根源的なものに突進して行き、一切が覆いをはがれて白日の下にさらされるに至った。「帝国ハ今ヤ自衛ノ為蹶起起ッテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と偉大なる方向を示し賜った。恐れおおきことではあるが、私共には此の過去の十年の覆が此の一瞬に取去られた。暗雲の後に太陽が輝き出でた。（中略）人々は総力戦を云為したが、私は信ずる。未だそうではなかった。われわれは単に総力を準備して来たに過ぎない。民族の奮起が用意せられて来たに過ぎなかった。しかも只今の此の瞬間から此の総力を挙げて戦うのである。わが民族の怒りが発したのである。新しく未解決であった過去十ヶ年のわれわれの難路は今では豪も難路ではなくて、却って今後の十ヶ年の大道のために用意であり準備であり戦の経験となってわれわれを助けてくれるであろう²²⁾。

徳川夢声（弁士・漫談家・作家 1894～1971）

- ・まったく一日として神経の安まる日はないのであった。私たちは今の言葉でいう、ノイローゼになっていた。これ以上、こんな緊張の日々が続くのは耐えられない。そこへもって十二月八日の太平洋戦争だ。なにはとまれ、これでどっちかへ片づく。ヤレヤレという気もちであった²³⁾。

- ・ 帳場のところで、東条首相の全国民に告ぐるの放送を聴く。言葉が難しすぎてどうかと思うが、とにかく歴史的の放送。身体がキューツとなる感じで、隣りに立っている若坊（女優若原春江）が抱きしめたいくなる。表へ出る。昨日までの神戸と別物のような感じだ。途から見える温室のシクラメンや西洋館まで違って見える²⁴⁾。

中川與一（小説家・歌人 1897～1994）

十二月八日、大詔が渙発せられ、米英との国交が断絶せられた事は、生をこの次代に受けた者の無上の光栄であり喜びである。

これこそ世界歴史への一大転回の御命令であって、吾々は過去と遮断して全く別の體系に這入ったことを自覚せねばならぬのである²⁵⁾。

中野好夫（英文学者・評論家 1903～1985）

私はただ与えられた職域の仕事を、一路戦争遂行の方向にむかって無我夢中に押し抜くばかりだ。（中略）今日の如き時代はいやしくも処士横議の時ではなく、国家 大方針の如きは最高当事者の意志と知能に全幅の信頼をおいて、私たち一国民は与えられた職域にただその全力を尽くすべきである。（中略）たとえ情勢が「アメリカの生産力怖るべし」を宣伝しようとも、もとより政府最高首脳部の懸命周到なる対処に満腔の信頼を置いて、私はなおかつこれを粉碎し去るべき決意を固めるだけである。ただ頭を下げて押し抜くのだ。御稜威の下、この皇土を外にして何処にわれらの祖国がある。禍福ともに、私は一切をあげて皇国とその運命を共にすることに何の悔いがある。戦前屢々知識人、文化人の無為無力が叫ばれた。その時も私は決して然らざる旨を幾度か書いたが、もとよりそれは嵐の中の蚊の鳴き声にも比すべきものだった。だが今こそ真の知識人、文化人が最も信頼に値する人間であることを、よろしくその実践によって示すべき秋だと思う²⁶⁾。

長興善郎（小説家・劇作家・評論家 1888～1961）

生きているうちにまたこんな嬉しい、こんな痛快な、こんな芽出たい目に逢えるとは思わなかった。この数ヶ月と云わず、この一二年と云わず、我等の頭上に暗雲の如く覆いかぶさっていた重苦しい憂鬱は、十二月八日の大詔渙発とともに雲散霧消した。（中略）戦いに於て何よりも大事な銃後国民の挙国的支持の原動力たる義憤と敵愾心とは、到底斯くの如く自然に一致しては燃え立ちきらず、まかり間違えば、軍のみの手前勝手にやったことの如く感じる向さえなかったとは保し難い。何と云っても我等は既に五年に渉る戦争を遂行して来た挙句なのである。英明なる天皇は実にこの上もない絶好の機会を過たず捉え給うたものであり、又その詔勅に聊かも第三国に引き擦りこまれたといふ如き意味合がなく、飽まで自主的な発動であることを明かにし給われた点も立派であった²⁷⁾。

林勉（旧制広島高校1年生）

その朝の授業は、鬼のあだ名で文化生に最も畏怖された雑賀教授の英語だった。廊下のマイクが臨時ニュースを伝えると、教授は廊下に飛び出して、頓狂な声で“万歳”を叫んだ²⁸⁾。

※雑賀教授は戦後広島原爆慰霊碑の「安らかに眠って下さい。過ちは繰返ませぬから」を書いた人物。

火野葦平（小説家 1907～1960）

新しい神話の創造が始まった。昔高天原を降り給うた神々が、まつろわぬ者共を平定して、祖国日本の基礎をきずいたように、その神話が、今より大なる規模をもって、ふたたび始められた²⁹⁾。

古川ロッパ (コメディアン 1903～1961)

ラジオ屋の前は人ばかりだ。切っばつまっていたのが、開戦と聞いてほっとしたかたちだ³⁰⁾。

武者小路実篤 (小説家 1885～1976)

- ・真剣になれるにはいい気持ちだ。僕は米英と戦争が始まったのに、何となく昂然とした気持で往來を歩いた。
くものなら来いと云う気持ちだ。自分の実力を示して見せるという気持ちだ³¹⁾。
- ・大東亜戦争が始まって、我等の気持も今までよりずっとひきしまってきた。皆反って気持が明るくなったと言っていい。(中略) 大東亜戦争の使命と言うものが実にはっ切りし、現代の日本程、光輝ある時代はないと言うことをはっ切り自覚出来たからである³²⁾。

こうした文化人や知識人たちの心情の吐露は、開戦の報に接したと同時にほぼ間髪を入れずに発せられたものであるだけに、彼らの真情を偽りなく示している。人物ごとに微妙なニュアンスは異なるが、彼らがほぼ一様に洩らしているのは、「別人になっているような気、(中略) 一間も二間もある濠を、一気に跳び越えたような気持」(獅子文六)、「世界は一新せられた。時代はたった今大きく区切られた」、(高村光太郎)、「天高く、光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた」(竹内好)、「日本も、けさから、ちがう日本になった」(太宰治)、「新しい神話の創造が始まった」(火野葦平)、というように、米国との戦争が既定の事実になったということに対する「爽快感」と「開放感」である。

その「爽快感」と「開放感」を構成していたのは、「これでどっちかへ片づく。ヤレヤレという気もち」(徳川夢声)、「われわれの一切の思考と一切

の行動を挙げて悉くが其の目標、方向に於て此の瞬間に確定した。一億の国民が純一無二の大目的に向かって突進することが定まった」(東畑精一)、「一切が明らかとなった。天高く、光清らかに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。ここに道があったかとはじめて大覚一番、顧れば昨日の鬱情は既に跡形もない」(竹内好)というように、もはや日米開戦といった不可逆の境域に突入したことによって否応なく自己の進むべき方向が決定されたという感覚をともなったものであった。

そしてそれは、「わが向ふところ今や決然として定まる」(太宰治)、「くるものなら来い～自分の実力を示して見せるという気持」(武者小路実篤)というように、その先にある未踏の境域に自己を投じていく「勇躍」の感覚とも同居していた。それは以後の未踏の境域に向けた創造の原点に、今まさに自己の参画が求められているという覚悟と壮意を新たにしたような「爽快感」であった。

こうした安心感と相即していればこそ、この「開放感」は表現の妙を加えようとする意思をはね返すような、あるいは技巧をこらした表現を加えたくないと感じさせるような、剛毅であるとともに清冽な「開放感」であり、さらにはこの「開放感」に人為的な表現の芽が摘まれることがむしろ快感であるような種類の「開放感」であった。

3. 「大東亜戦争」の特性と天皇制の関渉

こうした知識人たちの過剰にもみえる反応は、多くの国民がそうした「開放感」に陶醉しているその熱量に感熱して芸術表現にならない言葉を発してしまったという側面が無視できない。にもかかわらず、開戦当初の熱狂と「開放感」が戦況の悪化にともなって漸次減衰していくなかで、当初一般民衆の戦勝熱に感応する感の強かった知識人の言説は、逆にその減衰を押しとどめるような機能を発揮した。この時点においてこそ、知識人の言説がデスペレートなイデオロギー教化としての性格をもったといえよう。

こうした知識人の言説が蓄積して反響しあうことによって、当初「避けることができない戦争」というニュアンスを残していたものが、「戦うべき戦争」から「戦うに値する戦争」へ、そして「絶対に戦わねばならない戦争」へと激化していった。

このようにして、目前の戦争は、すべての国民が関与し、エネルギーを投入するに値する戦争へとその「意義」が再創造され、道義化されていった。戦争の美化とは、そうした道義化を前提にはじめて「効力」をもったといえよう。

その戦争の道義化を行う際に念慮をつくさなければならなかったのが、西欧との距離感であった。米国・英国といった西欧先進国を撃破することを目標に掲げた「大東亜戦争」を道義化しようとするれば、それが「道義」である所以を西欧的価値や理想とは異質の「価値」において根拠づけなければならなかった。ここにおいて、「大東亜戦争」の指導理念は西欧的価値との同一線上の落差に解消されない異質の価値であることが求められた。こうした非西欧的価値の探究は、それまで西欧を憧憬しながらもそれに対する劣等感を拭い去ることができなかった多くの知識人や一般民衆の壮意を鼓舞した。それは「長い間こびき廻されながら、なめられながら、しぼられながら」³³⁾ 隠忍してきた積憤をいまこそ晴らすという感覚であった。

しかし、ここには二つの問題があった。第一には、安易に西欧を否定したり、凌駕を試みるにはあまりに近代日本の知識人たちは西欧に親しみすぎていたということである。科学技術をはじめとして、おおよそあらゆる学知は西欧を先蹤としてきた。特に戦時下における国家総力戦の場合、西欧を範とする軍事力や国内産業を効果的に統合、活用することなくしてその遂行はありえない。このことは何よりも知識人たちの知るところであった。つまりとてころ知識人たちの対応は、「西欧から学び取ったものをもって西欧を越える」という背理的な命題に苦慮しながら、それをあたかも非西欧的理念への立脚という擬態をとりながら推し進めるといふ困難を背負いつづけなければな

らなかったということである。

第二に、対アジア戦争という要素を含む「大東亜戦争」を遂行するにあたっては、求める非西欧的理念を日本の固有性へと内閉する方向に探究してはならなかったということである。なぜならアジアにおける「主導国」を標榜するためには、アジア諸国に通約可能な指導者原理を擁立しなければならなかったからである。しかし、それは主導国であるべき日本が他のアジア諸国と等列化されてしまうフラットなアジア主義への回帰ないし国粹主義への内向であってはならなかった。非西欧的でありながらアジア主義に回帰せず、また日本固有主義にも凝固せず、アジア諸国と西欧の双方に対して「普遍性」を標榜できる理念の擁立。これはまさに至難の技であった。が、ほとんど無謀とも思えるこうした「普遍的理念」の捻出に乗り出していかざるを得なかった点に日本の戦争指導理念の特異性が存在した。

大日本帝国がこのような「大義」をまとった戦争を遂行する主導国家にふさわしいことを僭称するためには、単に掲げる理想だけでなく、東亜の指導者に相応しい實力(国力)を備えていることを内外に示すことが必要であった。そのためには、西欧への対抗的原理を掲げながらも、実質的には西欧国家を先蹤とする国力増強の方法を援用することは避けがたい。これは日本古来の歴史の「優越性」の徴証とされた天皇制とは折り合いの悪い現場環境を作り出してしまうことにならざるを得ない。戦時体制という極限状態は、天皇制をこうした隘路に追いやらずには置かなかった。天皇制がその機能の十全の発揚を期待された戦時下は、実は天皇制が内包していた深刻な背理が露見する場でもあったのである。この背理は、天皇制の本質に迫っていく重要な手がかりとなる。

日米開戦が多くの知識人や一般民衆の多くに感銘を与えたのは、それが国民の生活空間を一気に飛び越えて、国家の公的意思として表明されたことが大きな要因をなしていた。ではそうした生活空間から離れた公的意思であればなぜ多くの国民の協賛を引き出しうるのか。それは多くの国民に、それに

協賛することは私心から離脱した義心に基づいたものという幻想を与えるからである。それには開戦が「開戦の詔書」、すなわち「天皇の決断」ということを前面に押し出して報じられたことが大きく作用していた。

日米開戦の報に接して国民の多くが表明している「昂揚感」は、積年の鬱屈感の解消といういわば私的な情念が「天皇の意向」への感応という形式を踏むことによって、それ自身が公共的意味を持つかのような幻覚に転じたものであった。「開戦の詔書」という形式のもとに「天皇の意向」として公的に開戦の「必要性」が謳われたことは、本来ならば後ろめたい応報感情が「義心」へと浄化されるような感覚を国民に与える「効果」を持ったのである。

この国民の私的な情念を掬い取ってそれを公的な意思へと変換する装置としての機能が、近代天皇制の強靱さを担保していた。近代天皇制とは国民それぞれの情念を、国家の公的意思と接合する巧妙な装置であった。

簡素な口上をもって読み上げるように作られた「開戦の詔書」は、もはや国民の情念である痕跡を明示的には留めてはいない。しかし、それはむしろ国民の情念を簡素な口上へと精錬したことによって、逆に多端な国民心理の隙間に分け入り、その心底にまで打通する穿孔力を備えていた。この穿孔力は開戦に逡巡していた国民の心底までも射貫き、一気に開戦の高揚感が吹き抜ける風穴をあけることになったのである。

それは「民草の心に浸透さすべき最大の言葉としては、ただ御詔勅あるのみ」(亀井勝一郎)³⁴⁾という目算のもとに、「孤高峻厳の言葉を、解釈ではなく涙とともに感受する健全な本能を刺激する」(同)³⁵⁾効果が期待されたものだったのである。

「開戦の詔書」が触発した熱狂の瞬間こそ、日本近代全体を通して国民のなかで天皇の存在感が極大化した瞬間であった。その意味において、国民にとっての「大東亜戦争」の性格と、国民にとっての天皇の存在感の肥大化は相即していた。「われわれの一切の思考と一切の行動を挙げて悉くが其の目

標、方向に於て此の瞬間に確定した。一億の国民が純一無二の大目的に向かって突進することが定まった」という前出の東畑精一の言辞はそれを物語る。

ここで、天皇の存在感を肥大化させた「大東亜戦争」とは国民や文化人にとってどのような「意義」を持つ、ないし「意義」を付与された戦争だったのかについてさらに議論を掘り下げておかねばならない。それを本格的に検討する際の手がかりを得るために、もう少し「大東亜戦争」の開始を文化人たちがどのような感慨をもって受けとめたかについて触れておかねばならない。

それには、小説家の石川達三（1905～1985）と評論家であり英米文学者でもあった本多顕彰（1898～1978）がそれぞれ『文芸』1942年1月号に掲載された論稿のなかで次のように述べていることは参考になる。

まず石川は、開戦の報に接した感覚を次のように述べている。

- ・激戦の数日を経てからやや落ちついて来た感情のなかに私は、この時代に生きて居ることの喜びを率直に感ずることができた。東亜の歴史、世界の歴史を転換せしむる為の大動力としての日本を眼のあたりに見ることは、祖先の誰もが知らなかった現代日本人の喜びである。

（中略）

文学の立場から言へば、私たちは今日まで自分の為に作品を書いていたと思ふ。作品を書くことによって自分の生活があった。しかし、より大乗的な文学の立場が考へられるのではないか。もっと自己を放棄して、自己を離れて、一つの国富としての文学を創作するといふ態度が考えられるのではないかと思ふ³⁶⁾。

- ・対英米戦が布告されて、からっとした気持です。

かつて私は、敵を援助するものは、また敵であるということを書きまし

た。私は「敵性」といふような曖昧な言葉を好みませんでした。「敵性」といふ呼称が廃せられて、「敵」といふはっきりした呼称が用いられるようになって、私のみならず、国民全体がからっとした気持だろうと思います。聖戦といふ意味も、これではっきりしますし、戦争目的も簡単明瞭になり、新しい勇気も出て来たし、万事やりよくなりました³⁷⁾。

まず石川は、「東亜の歴史、世界の歴史を転換せしむる為の大動力」という存在感を高めつつある日本の「勇姿」を目前にすることのできる自己の喜びを「祖先の誰も知らなかった現代日本人の喜び」というように、普遍的広がりをもつ「喜び」と意義づけている。そのうえで、なぜそれが自身にとって「喜び」であったかの理由を、それによって自身が自己を離れて、より大乗的な立場から創作活動に望めるようになったからであると述べている。この論稿は回顧談ではない。あくまで1942年1月号の雑誌に掲載された（前年12月8日の開戦直後に執筆された）論稿であり、石川が、大日本帝国が世界の創造主体に飛翔しつつあること、それを躊躇なく自己を捨てられる対象の出現であると開戦直後から感じていたことを示している。

しかしそれにしてもなぜ、「自己を放棄して、自己を離れ」ることが、そんなに大きな喜びと受け止められるのであろうか。石川は明示的に述べていないが、ここには単に戦争という「国家的事業」に参画できるということに対する直情的な喜びとしてだけすまずことができな屈曲した心情が投影されている。それは、自らを執拗に拘束してきた羈絆から自由になれる爽快感である。近代日本の多くの知識人、文化人にとって家や地域社会といった自己を拘束する外部的な規律もしくはそのもとでの生活といった日々の現実、自らの精神の自由、そしてその縦横な発揚を妨げる桎梏であった。石川のいう「作品を書くことによって自分の生活があった」という述懐の意味するところは、自己を縛る生活のために挺身しなければならないという現実の息苦しきである。いわば現実の生活の場における自己は、かれらが真の自

己と感じられるような自己では無かったのである。しかし彼らはそれを自己の閉塞と感じながらも、「偽りない自己」をリアルに実感し、表現する術を持たなかった。

彼らの自意識の働きだけでそうした自己に対する旧来の緊縛から逃れることは、きわめて困難であった。そうした彼らにとって戦争への挺身は、その羈絆から脱する絶好の機会に他ならなかった。彼らは戦争という「大目的」のために、「もっと自己を放棄して、自己を離れて、一つの国富としての文学を創作するといふ態度」に徹した末に「大乘的な文学の立場」に到達できるという幻想を抱くことができたのである。そこに彼らは、葛藤に悩まされてきた旧来の自己が消失する新境を夢見たのである。

一般の民衆が戦争支持に向かう心性にも、これと類似した面が存在した。つまり戦争という国民的「大業」を支持することによって、むしろそれまで自己を拘束してきた共同体的羈絆の外に逃れ、共同体の外部から共同体を見返すことのできる栄達感に促される傾向が見られたことである。上記の石川の論述のなかにある「祖先の誰もが知らなかった現代日本人の喜び」とは、こうした文脈のなかに位置づけてはじめてその含意と広がり理解できる。

共同体的羈絆が場において定着し再生産されてきた歴史を背負ったものだとなれば、それに拘束されてきた一般民衆の自己とは、そうした場に累積した歴史に拘束されてきた自己であった。それは一般民衆が重苦しく感じながらも、家、村落共同体といった「公」と分かちがたく交錯してただけに、離脱することがきわめて困難な拘束であった。その強固な拘束から離脱するためには、通常ならば、そうした「公」の外部にあるより権威性の高い「公」的権威（終局的には国家的権威）が貫徹する権力空間に帰属すること、具体的には国家的「公」により近い上位の国家的職業身分を得て官界に入るか、もしくは職業軍人としての昇進をめざすことが常套的な手段として選ばれる。地方の有能な青年たちが官立学校に入学し、高等文官試験の合格を目指して鑄を削る所以である。しかしそれはごく一部の能力と経済的条件にめぐ

まれた青年に限られていた。

戦争への主体的参画は、そうなる道が閉ざされていた多くの青年層にとって、自身が国家的事業の一旦を担うことによって旧来の共同体的世界を外から見返せる窮余の機会だったのである。「大東亜戦争」に協賛してそうした自己を乗り越えようという幻想は、まさに自己を未知の空間的広がりをもった「世界創造」の現場に投じ、そこに働く力と同位化することによって、かつて自己を拘束してきた歴史から蟬脱するような昂揚感を掻きたてられる行為に他ならなかった。

上記の石川の言明は、こうした一般の民衆の心性と交錯する契機を含んでいた。

これに対して本多は、自身も含めて「国民全体がからっとした気持」になったという感慨を述べている。なぜ本多（C国民）は「からっとした気持」になったのか。叙述によれば、敵が具体的対象として明確に捕捉され、共有されたこと、その結果として戦争目的が鮮明になったことがその理由になっていることが分かる。

石川の戦争目的が「東亜の歴史、世界の歴史を転換せしむる為の大動力」の創造を高唱するものであったのに対して、本多のそれはより直裁に米国の打倒であり、その点で両者は異なっているが、多くの場合、本多のいう米国への敵対心は石川が掲げる「大義」のための必要事とみなされて多方面の共感を得た。この双方を含めて戦争目的は「簡単明瞭」（石川）になり、国民が自らのエネルギーを注力する対象の明確化がはかられたといえよう。

ただ、見逃してはならないのは、これらはいずれも思いの差はあれ、戦争という公的な営みに協賛することによって自らの存在と精神を束縛する軛から逃れようという「私情」の屈曲であったということである。随所にあたかも道義に殉ずる感情の昂ぶりとおぼしきものが表明されてはいるが、それはあくまで自己の私憤をぶつける対象が公権力によって与えられ、公認されたためにそれが公的義憤に転相し、そう思い込みたい彼らの心的要請には

まったためである。「公」から除外されてきた（と実感してきた）個人が、戦争という国運を左右する「公的事業」に協賛することによって、あたかも「公」の一翼に参画できるかのごとき幻覚に酩酊することは、怨嗟や私情に振り回されてきた国民にとって自らの後ろめたさを緩和してくれる名状しがたい快感をともなっていたのである。それが多くの国民が言明した「爽快感」の真相である。

この国民の私情（の屈曲）と戦争との関係には、かなりの振幅が含まれていた。すなわち全体のなかに個が帰無するような感覚に陶醉した個人もいれば、むしろ全体を自明のものとして擁することによって、かえってそのなかでの自身の持ち分が安堵されるような感覚を抱く者が存在したことがこれである。後者の場合は、戦争という「大目的」を擁することによって、それまで重要視されていないという感覚に苛まれていた自身の「持ち分」にも応分の評価が与えられ、心置きなく自身の役割に専心できるという自負を得た「爽快感」であった。前出の中野好夫の「私はただ与えられた職域の仕事を、一路戦争遂行の方向にむかって無我夢中に押し抜くばかりだ。（中略）戦前屡々知識人、文化人の無為無力が叫ばれた。その時も私は決して然らざる旨を幾度か書いたが、もとよりそれは嵐の中の蚊の鳴き声にも比すべきものだった。だが今こそ真の知識人、文化人が最も信頼に値する人間であることを、よろしくその実践によって示すべき秋だ」という自負や、「かういう時期にこそ、文学には「文」の領域があることをはっきり認識することが出来る訳だ。今でのように「軍」や「政治」に追従していたのから去って、明確に己が本然の使命の下に、今日の榮えある国民的試練の時を自力で生きてゆかなければならぬ」³⁸⁾という河上徹太郎の決意は、こうした感覚に裏付けられたものである。

ただこうした感慨を抱いた知識人たちに等しく当てはまるのは、彼らが私情を投影した全体は、個人の期待に応じてそれを収容し、庇護してくれるような生やさしいものではないということに盲目であったことである。それは

個人の私情を圧殺するような全体でしかないことに彼らはあまりに楽観的すぎたといえよう。

ゆえに高村光太郎が真に解放を実感できたのは、自己を託した全体が否定された戦後をまたなければならなかった³⁹⁾。そうした敗戦後の「解放」はまた別の問題を内包していたが、それについては本稿で詳述する余裕はないので、別稿を期したい。

Ⅱ. 表現者の幻覚と煩悶—「本当の自己」の渴望と探究—

1. 我と美感の転相—高村光太郎—

ではなぜ、知識人、特に芸術家までもが、やがて自らをも破滅させるそうした幻覚に身を委ね、一般民衆の思いに同調したのか。それは、そうせざるを得ないほど、芸術家たちは自らの精神の葛藤に耐えかねていたからである。そしてにもかかわらず、その葛藤を克服する術を見出せていないこと、正確にいえば、そうした術が存在するかどうかに不安を抱いていたからである。

例えば 1929 年に高村光太郎の次ぎのような詩を創作していることは、そうした不安が彼らの精神に充満していたことを示すものといえよう。

激動するもの 高村光太郎

さういふ言葉で言へないものがあるのだ

さういふ考方にのらないものがあるのだ

さういふ色で出せないものがあるのだ

さういふ見方で描けないものがあるのだ

さういふ道とはまるで違った道があるのだ

さういふ圖形にまるで嵌まらない圖形がなのだ

さういふものがこの空間に充満するのだ

さういふものが微塵の中にも激動するのだ

さういふものだけがいやでも己を動かすのだ

さういふものだけがこの水引草に紅い點々をうつのだ⁴⁰⁾。

この詩は、この世界に充満した雄渾な力の波動と自己の根源で交信しながら、どのようにしてそれが発する熱量に見合う形を与えるかが見通せない焦燥感に満たされている。それは表現者としての自己の本分がまっとう出来ていないという葛藤もであった。この葛藤は高村だけにとどまらず、同時代の多くの詩人の精神を悩ませた葛藤であった。しかしそれはいかにも解消されない葛藤であった。高村自身、自身の裡に蠢くこの熱塊のような力に形を与えられる表現手段などそもそも存在せず、ましてそれを捻出しようとすることは無為なあがきにすぎないのではないかという疑念を抱きながら、その不可能事を前に煩悶しつづける以外にはなったのである。

そのように懊悩する高村がそれを突破するための彼岸の境地として探訪しつづけたのが、「千萬の現象そのものに、すぐ裸を見る力」を得ること、そしてそのために「どうにもならない根源に立つもの」を触知できる感覚であり⁴¹⁾、それとともに「あらゆる中間物を跳び越えて直ちに人類の心と交渉」できるような「厳粛な自己」の絶対化であった⁴²⁾。

通常感覚からいえば、自我の絶対化は対象を柔軟に捉えることを阻害し、それを固守するかぎり「どうにもならない根源に立つもの」など触知しようがないのではないかと思われなくもない。が、高村は逆に「自我を育て、富ましめてゆく人間本然の欲望が実在そのものを無窮に追はしめるのだ。そこには何の外的交渉もない」とする。これはいうなれば、自己の内発的欲望

だけを赤裸に追及することが、逆に欲望を突き抜けるような感覚、例えていえば、色情への没我的なの耽溺が自我から俗情を振り落とし、聖俗の彼岸にある人間の深層的部分にたどり着くような感覚である。これは高村の直覚的な境地であるが、哲理的に見てもこの高村の直覚は正しいであろう。欲望への絶対的な没入は、自我を意識する自我を溶解させる。戦争を前にした自我の溶解は、その時点で全体への自我の融合である。自我の絶対化が、自我から時空の制約を取り除き、自我の全体への融合を招来するというのは、ペダンティックな論理的遊戯ではない。

こうした自我の転相が必ず戦争を受容する素地となるわけではないが、高村の場合、「千萬の現象そのものに、すぐ裸を見る力」を得べく、懊悩する自己を処理しあぐねたことが戦争を受容する素地となっていた。つまり、自らを揺り動かすこの力に形を与える術がないという焦慮が深まるにつれ、戦争をその力の組織化であり発条として感受する感覚が滲出しはじめたことがこれである。それは高村にとっては、「その力に形を与える表現者」から「形をなした力を表現する表現者」への転位であった。それを高村は、どうしようもない大きな外部的力に帰無することによって自己の本来を回復する境地であるかのように表現している。少なくとも表面的には、ここに挫折感や盲目的狂信は認められない。むしろ高村が明示的に表現しているのは、大きな外部的力に自己を放下することによって得られた悦楽と壮意にも似た境地である。

「大東亜戦争」を詩的表現の転生をはかる天与の機会であるかの如くに見なしたのは高村だけではない。日本浪漫派の詩人で「大東亜戦争」中はシンガポールの昭南学園の校長を務めた神保光太郎（1905～1990）も「国民詩の進撃」のなかで同等の感慨を次のように述べていた。

昭和十六年十二月八日は、日本の朝であり、世界史の黎明であると同じく、日本詩歌の力強き暁でもあった。（中略）詩はこの日、この数年、

到るべくして、到り得なかった地点に到達した。何か遠慮深そうに、どこか懷疑めき、物思はし気に、つぶやきつづけていた詩は、ここに明確に、おさえておさえても、制しきれない沸騰する叫びを体験した。詩がかくまで、高陽的に歌われ、読まれ、綴られた日を知らない。この一ヶ月、詩と詩人達は、地底から震撼されたといっても過言ではない。

この十ヶ年、日本の詩を蚕食に蚕食を重ねた、呪うべき散文主義は、ここに完全に潰え去ったのである。支那事変の渦中から生まれた幾多の戦争詩にすら、この散文主義が、蛇の如くまとわりついて離れなかった。日本の若き詩人達は、歌うことを忘れて、ひたすら、うなだれながら、つぶやくとことに終始していたのだ。(中略)昭和十六年十二月八日。この日は、詩に再び翼の与えられた日である。詩が本来の翼を持つことの幸福をしみじみと感じ得た日である⁴³⁾。

神保はまさに全国民的規模で昂揚した戦勝熱が詩人に伝播し、「おさえておさえても、制しきれない沸騰する叫び」、すなわち言葉に先行する「诗情」を呼び起こしたことを詩の革新を促す天与の機会であるかのごとく言祝いでいる。浪漫派詩人神保は、そうした言葉に収まらない激情こそが従前の散文詩を越え、成形された言葉以前のものを捉える純正な詩を培養するものと見なしていたために他ならない。昂揚する国民的激情との交信を国民詩の要件として迎え入れるこの感覚は、高村にも共通していたと思われる。

しかしここまで高村の精神の軌跡を追跡した上で拭えないのは、はたして高村は、こうした軌跡の末に心底から安住できる境地に到達できたのかどうかという疑問である。むしろ「その力に形を与える表現者」から「形をなした力を表現する表現者」へと転位したことによって、その力そのものを自己の内に感得することができなくなってしまっているという恐怖感にも似た不安が心底に潜んでいたのではないか（この力そのものに形を与えたいという渴望は戦後も衰えない。この点については、別項で述べたい）。

むしろ高村は、その不安を打ち消すために、戦争を美化することに全身全霊を賭けるという態で挺身したのではないか。それは、高村がすでに「大東亜戦争」の前哨戦ともいえる日中戦争の段階で「戦時こそ美を語る最も好適の時である。美を生活から遊離したもの、贅なるものと考え一般観念を打破する絶好の機会である。美とは生活への付加物ではなくて、生活の内部から人間を支えている精神的基盤である」⁴⁴と述べていることにも明らかのように、戦争こそ美の創造の源泉であり、生活の内部から美を捉え直す機会の提供であるという主張へと極論化された。

こうした主張の延長線上に、「大東亜戦争」下の高村は、「大東亜戦争」の「創造的作用」と「意義」を誇大に揚言し、それに懐疑を押し殺して無理に自己を溶け込ませようとするかのごとき傾向を見せるに至ったという面が無視できないのではないか。逐一詩題を挙げることは差し控えざるを得ないが、1941年末の「大詔渙発」以降、1945年8月の「一億の號泣」までの詩作の大部分は戦争を極度に美化した上で称賛した戦争詩と呼ぶほかないものである。開戦直後のものは興奮をそのまま表した態のものが多いが、開戦からしばらくたった後も戦争熱を清冽なものとして表現しようとしたものが多い。ここでは「決戦の年に志を述ぶ」(1942年)と「美をすてず」(1944年)の2作だけ例示しておこう。前者は開戦の約1年後の1942年12月30日作と記されており、翌1943年1月2日発行の『東京新聞』に掲載された。後者の「美をすてず」は1944年3月24日に作成され、翌4月30日発行の『週刊朝日』に掲載された。双方とも発行部数の多い日刊紙と週刊誌に掲載されているので、多くの国民の目にとまる機会が多かったと思われる。

決戦の年に志を述ぶ 高村光太郎

文字通り国民皆兵の日が来た。
老若男女國を挙げて今前線に居る。
九紫の火星楊柳木で

今年六十一の老骨でも
さっぱり還暦などといふ気がしない。
むしろ数字をさかさにして
一十六から始めたい。
日本はけふ、人がいる、腕がいる。
社会百般、決戦に向ふ。
決戦とは断乎として敵に勝つことだ。
敵の骨を切ることだ。
そこまで事が迫っている。
わたくしは美の世界を守りながら
この生活の一切をかけて彼らを撃たう。
この生活の一切をかけて彼らを撃ちながら
敵として美の世界を守りぬこう。
老兵必ずしも老を語らない⁴⁵⁾。

ここに芸術性は何もないが、老境に入りながらも戦争協力をおしまない自身の覚悟を述べた上で国民にもその覚悟を迫った詩である。

注目すべきは、「敵の骨を切る」、敵を「撃とう」という表現を使用していることである。これはさらに露骨に言えば敵を「殺す」ということである。戦時下においては、自身の死のみならず敵を殺害することすら美的に粉飾し、美的行為として鼓舞する必要性を公然と提唱する表現者も存在した。日本浪漫派の作家として知られる保田與重郎は、自身には未だこの心が薄いことを「私の文学者としての弱み」と断った上で、折口信夫の「遅しき心つり来る この夜らや。みなごろしにせむことをぞ 欲す」という歌を紹介し、こうした「感性(?)」の涵養が戦時下における表現者の課題であるという認識を次のように示している。

我々は、敵を「みなごろし」にせんと、たくましい心のつよくなる自然の状態をもつようにしなくてはならぬ。ならぬといふのは少し云ひ方がわるい、我々は今日明白に戦っているのである。我々は自分の生死さへ、自身で裁量できないのである。しかもその時の我々は、生命力の最高潮にいるといふ前提にいるのである⁴⁶⁾。

こうした折口や保田とは異なって、高村は「殺す」、「みなごろし」という直截な表現を避けながら、事実上敵を「殺す」ということに「この生活の一切をかけ」る決意を「美の世界を守りぬこう」という覚悟に重ね合わせて述べているが、「撃つ」というバールを被せた表現に逆に表現者の苦渋と義務感のうち混じった壮絶さを感じさせる。それとともに、本来凄惨な行為である敵の殺戮をあえて平俗なトーンで語ることによって非日常的な行為を国民の日常感覚に接合し、そのうえでそれを「美を守りぬく」自身の覚悟に仮託して国民の美感を転換させようという胆略に満ちた詩ともいえる。

「撃ちてしままむ」(1943年3月作)の「(前略)われら一億ところに雄叫びをあげて/今にして此の時、ただ彼らを撃ち盡さんのみ。われらの生活彼等を撃つ事によりて匡され/われらの思想彼等を撃つ事によりて深まる。(後略)」⁴⁷⁾も同等の「効果」を狙った詩作である。「撃つ」(露骨にいえば、「敵を殺す」という行為が生活を匡し、かつ深めるというのは、平時ならば読者を嫌な気分にするグロテスクな感覚である。しかし高村はそこにあえて楔を打ち込むがごとく、そうした行為を果敢に敢行する益荒男ぶりを「美」として慫慂し、その感性をもって国民生活を染め上げ、さらには自己に徹底させようとしている。これは一般的なナショナリズムの煽動や戦勝熱の単純な呼号以上に、人間の倫理的な感性の転相をはかることによって思考を麻痺させるような不気味な精神動員である。

では次の「美をすてず」はどうであろうか。

美をすてず 高村光太郎
美しきものわれわれの天地に満つ。
天に春夏秋冬の次第あり、
地に山林清泉の潤澤あり、
われらが傳統世々その美を濟す。
されば美は皇国の精髓にして
一億の士気これによって昂る。
われら愈烈しき戦の日に美をすてず、
夜を日につぎて勤務の汗にまみれる時、
国民悉く非常措置に座を蹶つて絶つ時、
日本の美きよらかにして高き力となり、
われら美を負ひて戦ふ。
むかしは簞に梅花を挿し
いまは整頓の美に満目凜々たらんを期す。
我勝ちと投遣りと白眼とは皇国の敵にして。
四邊つねに五十鈴川の流の如く
素に處して美に居り、
世界の俗臭を叱咤して
われら美しき皇国の天地と共に戦はん⁴⁸⁾。

趣旨は単純である。「皇国」の風土が培った清冽な「美」の豊饒さを「皇国の精髓」と称賛した上で、それに育まれた精神の「美」を力に変えようという思惑（「一億の士気これによって昂る」）が込められた詩である。ここでも高村は、「皇国」の自然環境とともにあった（とする）清冽感と益荒男的な勇壮感とを接合し、それを凜然とした「戦いの意思」に統合しようとしている。「日本の美きよらかにして高き力となり、われら美を負ひて戦ふ。むかしは簞に梅花を挿し…」というフレーズは象徴的である。注目しておくべ

きは、戦況がさらに悪化した1944年3月末に詠まれたこの詩は、開戦当初と異なり、盛り上がっている戦勝熱をさらに加熱させるのではなく、減退しつつある国内の戦意を鼓舞し、劣勢のなかでの継戦に向けた戦意を掻きたてるというデスペレートな目的にそったものであったことである。ここで凜とした梅花の放つ美を添えるのは、敵を屠るという蛮行を使命として遂行する主体を、「美を負ひて」凜然と使命に準ずる殉教者のごとくイメージさせる巧妙な観念操作である。

高村の詩は、自己犠牲を忍従するだけでなく、戦況の挽回のために反転攻勢に転ずる勇壮な姿勢に「美」を感じる感覚を、国民生活レベルに根づかせるために創作された戦争詩としての性格を備えていた。このモチーフはすでに1942年5月の段階で「今後の日本美術家はまづ各自の日常生活の根本から洗刮一新する心を持してその方へ向ふべきである」⁴⁹⁾と表明されていたが、このモチーフは戦況の悪化とともにより鮮明となったといえよう。

さらに高村の詩には、国民教化のためだけでなく、自身の意識を強健化するために行っているという特質が見てとれる。それは高村にとって、戦況の悪化とともに頭をもたげる自己不安を搔爬するという切迫感に満ちた行為でもあった。高村は、自らが同位化できるように戦争を観念上においてトータルに再創造することによって胸中の懐疑を打ち消し、「大きな力」に感応できる感覚を強化しつづけたといえよう。

2. 表現の原郷への帰還と「本当の自己」との葛藤—野口米次郎—

高村の詩を少し立ち入って検討したのは、高村が戦争詩人として特異であったからではない。こうした傾向は高村以外の多くの芸術家たちにも、ニュアンスや強度の差を含みながらも、共通していた。そして詩人をはじめとした多くの芸術家たちも、凜烈な「美」を創造する機会であるかのごとく戦争を礼賛することが、彼らの迷いや怯えを搔爬するための行為であることを自覚していた。そうでないかぎり、無残ともいうべき陋劣で性急な紋切り

型の表現をふんだんに含んだ作品を創作しつづけた理由が説明できない。当該時期の総合雑誌や文系雑誌ないし川田順『詩歌 太平洋戦争』（八雲書林、1942年）、三好達治『捷報いたる』（スタイル社、1942年）、同『寒柝』（大阪創元社、1943年）、吉井勇『歌集 霹靂』（一条書房、1943年）、佐藤春夫『奉公詩集』（千歳書房、1944年）、野口米次郎『八紘頌一百篇』（富山房、1944年）、室生犀星『美以久佐（みいくさ）』（千歳書房、1943年）などの詩集に収録された戦争詩歌の多くが、そうした類いの作品である。

そうしたなかであって、ここでは高村光太郎と同様に、結果的には「大東亜共栄圏」構想に同位化したとはいえ、より意味深長で屈曲した精神の軌跡を辿った野口米次郎（1875～1947）の戦争詩ないし戦時期の詩作に込められた苦悩と葛藤に焦点を当てることによって、「大東亜戦争」が表現者におよぼした精神的作用を考察してみたい⁵⁰⁾。

詩集『八紘頌一百篇』（富山房、1944年）に収録された次の野口米次郎の詩「勝利者」は、野口の決意表明であるとともに、戦争のもつ容赦のない苛烈なりアリズムを破壊の美学として表現することによって国民に覚悟を迫る狙いを含んでいた。

勝利者 野口米次郎

丸は飛ぶ、
 戦車は荒れる、
 飛行機は唸る、
 敵も味方も血を浴びて倒れる、
 ああ、絶望の暗雲は大地を蔽ふ……
 破壊の闇に使命を意識し、
 再生の光を求めるものが最後の勝利者だ、
 戦争の悲惨に野獣を脱して、
 神性に触れるものが最後の勝利者だ、

戦争は人間の形態を破壊し、
人間の制約を粉碎する、
人間の価値を顛落させる、
だが新生の創造は廢墟の間に生まれる。
怒號だ、猛撃だ、戦争だ、破壊だ、
破壊を最後まで極めるものが勝利者だ⁵¹⁾。

この詩でまず野口は、「敵も味方も血を浴びて倒れ」、「人間の形態を破壊し」、「人間の制約を粉碎」し、「人間の価値を顛落させる」という戦争の峻厳な現実にあらためて注意を喚起している。ここに示された野口の関心は、戦場が殺戮の場と化すという現実それ自身よりも、そうした現実が「人間の価値を顛落させる」ことの恐ろしさである。にもかかわらず、「最後の勝利者」になるためには、そうした「人間の価値を顛落」にさえ怯まず、「戦争の悲惨に野獣を脱して」、「破壊を最後まで極める」こと以外に道は残されていないという峻烈な戦争のリアリズムである。その上で、自身が非人間化する覚悟をもったうえで戦争に関与できるまでに強靱な意識をもった国民の創出をはかっているといえよう。

野口は、戦争がそれに関与する個人にこうした感性の鍛造を強いることを早い段階で気づき、自身の内面変化に引きつけて、次のような詩にまとめていた。

屠れ米英われ等の敵だ 野口米次郎
「屠れ米英われ等の敵だ」で町は溢れる。
私もこれを叫ぶ、聲を嗄らして叫ぶ、泣きの涙で叫ぶ。
私の若い時代の十二年間を養つて呉れた國だもの。
忘恩行為だって、國家の運命に替へられない、
過去の繋りは一場の夢だ。

昔の米英は私に正義の國だった、
ホイットマンの國だった、
ブラウニングの國だった、
然るに今は富の陥穽に落ちた放蕩者の國、
見てはならない夢を漁る不倫の國……
この不埒を天誅する、真実の米英を屠るのではないとするものもある。
私が米英時代に作った友人は多い、
最早故人になって、私の屠れを聞かずにすんだものもある。
この幸福は、どんなに私の幸福であるか知れない。
今なほ存命中の友人は私にいふであろう、
國と國との戦争だ、僕等の友情は破れるには神聖すぎる
……
馬鹿な、そんな念佛は一億一心が承知しない、徹底的だ、徹底的だ、
友情もろ共、君達もずばりと屠って見せる！⁵²⁾

かつての友人を「徹底的だ、徹底的だ、友情もろ共、君達もずばりと屠って見せる！」と言いつ切るのは、きわめて壮絶な「決意表明」である。もちろん野口には、ここに至るまでにただならぬ葛藤があった。なぜなら、米英は自身の「若い時代の十二年間を養つて呉れた國」であり、また自身が傾倒した「ホイットマンの國」であり、「ブラウニングの國」だったからである。

この詩のモチーフは、そうした自己の精神的故郷ともいふべき米英に対戦国として敵対することの葛藤を、「國と國との戦争だ、僕等の友情は破れるには神聖すぎる」という友人の最後の歯止めともいふべき悲痛な叫びをも振り切って、「友情もろ共、君達もずばりと屠って見せる！」と自己の内にある逡巡を見切る作者の内面変化を開示してみせることにある。詩の文面上では、作者は非情に徹する理由を、対戦国の精神的頹落と「忘恩行為だって、國家の運命に替へられない、過去の繋りは一場の夢だ」と個人の感情よりも

国家への忠誠がまさることを理由に挙げている。しかしこの通俗的かつ浅薄な理由は心底から発したものではない。

ここに示された葛藤は仮構された葛藤としての性格が濃厚である。野口はあくまで、「戦時ならば、当然存在してしかるべき葛藤」を詩上に仮構し、それを詩上で見切って見せたにすぎない。これはいわば詩上の仮想劇であり、自身の内面に深く食い込んだ葛藤を超克する野口自身の偽りなき心的ドキュメントではない。こうした仮構上の非情の美学であればこそ、国民教化の素材として「有効」なのである。

むしろ注目すべきは、これに関して野口には深い懊悩が存在したことである。それは詩やことばの本質にかかわる恐怖に近い懊悩であった。それは人間の精神を危機的状态に追い込む戦時下という状況のなかで深化した疑念、すなわち詩のことばは、いかにしてもその精神の懊悩の深層に届くことも、的確に捕捉して表現することもできないのではないか、たとえそれを「表現」したとしても、それは深遠な内面を硬化した表現の鑄型にはめ込むことによって、それを本来のものとは異なった貧しいものとしてしか再現できていないのではないかという疑念に発していた。これは表現技法や能力の欠如に対するもどかしさといった次元のものではなく、まさに表現の本質に向けられた深い懷疑であった。それは言葉を駆使して精神の内奥に無理に表現の輪郭を与えることは、その表現されたものが作者の手を離れ、逆に作者にも確信がもてない精神をあるかのごとく仮構しかねないという不安である。

次の野口の詩は、その壮絶な不安を表したものである。

第二の思想 野口米次郎

私は昨日詩を幻と観じた、
私はその恐怖に打ちのめされた魅せられた、
また引寄せられた後に追払はれた……
半しか知れないものは、

どんなに莊嚴であったであろう。
私は詩を愛人と呼んだ、その頬に接吻した、
また時には詩を化物だと呼んで吐気を覚えた。
私は確に詩に翻弄されたに相違ない、
だが私のそれに対する態度は嚴肅であった、
そして恐怖は私を悲しい感情の人間に仕立てあげた。
然るに今日の自分はどうかであるか。
私は恐怖の何物も感じないほど大胆不敵だ。
私は詩を薄暮の壁龕から引摺り出した。
私はその泣顔をぎら附く天日に曝した、
そして私は「お前の昨日の魅力は何処へいったか」と詩を翻弄した。
ああ、今私は悲しい感情を失って、
冷い第二の思想を拾ったのである……
第二の思想なるもの、
それが果して何の価値あるかを私は知らない、
恐らく乾枯びた葱か、
鐘詰の鱗以上に買へないであろう⁵³⁾。

ここで野口が開示し、見据えているのは、詩に対するアンビヴァレントな
思いに翻弄されながら、それに嚴肅に対応した主体が、「悲しい感情の人間」
に変貌していく感覚であり、次いでその困惑にさらされながらも、「詩を薄
暮の壁龕から引摺り出し」、「その泣顔をぎら附く天日に曝した」ことによ
ってもはや「恐怖の何物も感じないほど大胆不敵」になった自己である。それ
はまさに詩への恐怖感を内的に克服したというより、麻痺させた自己であ
る。

この結果野口がたどり着いた（「拾った」）のは、「乾枯びた葱か、鐘詰の
鱗以上に買へない」としか思えないような「冷い第二の思想」である。この

「冷い第二の思想」がどのようなものなのかについて、野口はこれ以上何も述べていないが、それが詩にまとりついた根本的不安を解消するほど野口のなかで熟したものとなっていなかったのはたしかである。

こうした詩人の内面の葛藤を注視することは、本稿の主題とズレるように見えなくもない。だがこうした自我をめぐる詩人たちの内面的葛藤を尖鋭化したのは、まぎれもなく戦争である。「大東亜戦争」とはこうした形で詩人たちの鋭敏な自我に食い込み、揺さぶる衝撃力をもっていたのである。

先述した高村光太郎の表現をめぐる葛藤は、濃縮した言葉を駆使しなければならぬ詩人たちに共通する葛藤であった。それは当初自己と自己を表現する言葉との相関性をめぐる葛藤であったが、その葛藤はやがて自身はそもそも表現するにたる自己を生き抜いているのか、さらにはそうした自己は存在するのかという不安、いわば自己の存在が実感できないという不安へと深化した。それは、自身は本当の自分を生ききっているのか、偽りの生を生きていないかという自己の存在性への根本的疑念でもあった。

戦争は、こうした不安を尖鋭化させるとともに、それへの同調を誘うことにおいて、その不安を一時的に麻痺させるものでもあった。

野口のこの「第二の思想」は、こうした不安に対峙する自己の内に蠢く思念を表現したものである。野口は「乾枯びた葱か、錐詰の鯛以上に買へない」ものと自嘲してみせているが、筆者はこの「第二の思想」は野口の仄かな希望の示唆だったのではないかと考えている。それは自身の排出した言葉が時空間を飛翔して、自身が瘦身となり死滅したあとにも、自身の思惑を超えた美や意味を発見され、新たな創造の源泉となる可能性への期待である。「第二の思想」とほぼ同時期に創作されたと考えられる次の「拈華微笑」のなかには、こうした野口の思いが込められていると見なすのは穿ち過ぎであろうか。

木は枝を振り落とした、

(私も詩の葉っぱを散らした)

寒天に瞑目して動かないその姿は槍の如しだ、

今晏如たる冬眠に入っているのであろうが、

端から見ると餘りに荒涼たり過ぎる、

ああ、冷たい姿だ。

(私も第三者にさう見えるであらう。)

私は満目一點の紅を見ない地面を、

二本の足で釘を打って行く、さくりさくりと……

私は一本の木を洗ふ細流の側に立ちどまる、

そして過去幾十年の間、餘りに注意しなかった

それは水面からたち上る温い靄を隔てて、

逆さに映っている木の姿だ、

何といふ美しい銀色の四肢だ。

私は頭を上げて葉っぱのない木を見るに過ぎない、

枯木に等しい荒涼たるものだ。

私は叫んだ、『地上の姿は嘘ではない、勿論のことだが、水中の姿にも
う一つ本黨のものがある。

私を詩の枯木のように思ふ人に敢へていふ、

否ないな、私はいふ所がない、

何事も拈華微笑だ』⁵⁴⁾。

この詩は、自身を「枝を振り落とし（詩の葉っぱをまき散らし）」たために荒涼とした瘦身の枯れ木になりはてた木に例え、ある日過去にはあまり注意したことがなかった水面に逆さまに映ったその木の「美しい銀色の四肢」を広げた姿のなかに、もう一つの自己の姿を幻視したという内容である。その刹那「もう一つ本黨のもの」が水中の中にあることを確信した野口は、詩

を枯れ木のように思う人に内奥の思いを吐露しようとするが、結局「私はいふ所がない」と口をつぐんでしまう。この口をつぐんだ野口の心境は、「第二の思想」で「乾枯びた葱か、鐘詰の鯛以上に買へない」と自嘲してみせた野口の心境と同等であろう。

野口には、「詩の葉っぱまき散らした」主体はたとえ「枯木に等しい荒涼たるもの」に見えようとも、無残な残滓ではないという存念があった。が、野口はそれを表明することなく立ちすくんでしまう。これは美術表現の主体の有り様にかかわる本質的な問題であり、戦争はこうした問題を表在化させる機会ともなったのである。

ここでは、この「冷たい第二の思想」と同居しながらも、それでも拭えない不安を野口はひとまず次の詩に表象されるような心境に着座することによって掻き消そうとしていたことに注目する必要がある。

心境 野口米次郎

表現を礼賛にのみ限ったことは、
私を一つの言葉に推込めて呉れたことは、
本当に有難い、
誰が理知の中止は蠻的行為だといふ。
人は私にいふかも知れない、
「お前は憐れな鳥だ、
足を現実縛られ、
竹の鎧戸を透かして空を眺め、
籠を離れて飛ぶことが出来ない。
お前は人生の光榮を教へらえたではないか、
お前は詩人の呼気を与えられたではなかったか。」
私は今三であり五である豊富な言葉の資産を捨てて、
あゝとおおの貧しい歎聲しか出せない啞の子になったかもしれない。

私は自分だけの貝殻に世界を作るために、
 もっと大きい広い世界を閉じたかも知れない。
 だが私は独善の墓場を掘っているのではない。
 私は制限の刺激にのみ酔っているのではない。
 私は今人生の凡てを、おおとああのあの簡素な一つの言葉で片付け、
 何物も持たない身の軽きに感謝している⁵⁵⁾。

「乾枯びた葱か、鐘詰の鯛以上に買へない」としか思えないような「冷い第二の思想」に逢着する感覚を抱きながら彷徨するほかなかった野口がたどり着いたもう一つの境地がここに示されている。すなわち、「人生の凡てを、おおとああのあの簡素な一つの言葉で片付け、何物も持たない身の軽き」状態を言語表現がたどり着くべき理想の極地として感受する境地である。ここに到るまでには、「豊富な言葉の資産を捨てて、ああとおおの貧しい歎聲しか出せない啞の子になったかもしれない。私は自分だけの貝殻に世界を作るために、もっと大きい広い世界を閉じたかも知れない」という煩悶があった。そしてこの煩悶を「私は制限の刺激にのみ酔っているのではない」という自覚によって制圧した結果たどり着いたのが、「人生の凡てを、おおとああのあの簡素な一つの言葉で片付け」る表現上の大悟の境地であった。

これは対象の本質を的確に表現すべく言葉を選びつくした末に、いくら贅言しても、また壮麗な言葉を駆使しても決して叶わないことを思い知らされた者にしてはじめて足を踏み入れ得る（ざるを得ない）言語表現の仙境である。散文以上に、詩という精妙な言語表現に携わる者は、真摯であればあるほど、こうした言語表現の臨界点に引きずりこまれてしまう。そこは記述言語はおろか、発話言語も息絶える言語表現の絶域であるが、同時に健やかな情念と一体化した作為のない無垢な胎生言語（「ああ」と「おお」）が蠢いている言語表現の生誕地でもある。言語表現を極めようとする者は、苦難の彷徨の果てにこうした言語の生誕地に帰還せざるを得ない。

よく知られているように、詩的表現上のモダニズムの一環としての象徴主義に傾倒していた野口であれば、表現の対象と表現手段との間の乖離を埋める困難に晒されることには、相当な耐性がついていたはずである。だが、ここで野口が遭遇したのは、そうした象徴主義が内包していた乖離とは同列に並べることができないほどの峻険な断層であった。野口がこの表現者としてのあり方を根本的に左右する問題に遭遇したのは、戦争詩の創作に従事したことが大きな契機となっていた。なぜなら、こうした境地に立ち至るには、言葉が衝いて出ないような感情の高揚が必要であり、開戦当初の昂ぶりはそれに相応しい劇症体験だったからである。日米開戦に遭遇した直後に坂口安吾が発した「涙が流れた。言葉のいらぬ時が来た」⁵⁶⁾という言は、まさに国民すべてがこの感覚を共有したことを感知したがゆえの感慨であった。言葉をかえれば、それはいわば国民すべてが「文学者」になったことの感得であった。国民すべてが「文学者」になった時、それは文学が無化する時である。これは文学が内包する悩ましい背理である。戦時下における激越な体験の共有は、表現者にこの文学の本質的ありようについての内省と覚悟を強いたといえよう。

さらに、人間の生死にかかわる情念を表現する機会が多い戦争詩の創作は、詩、ことば、表現が抱える本質的な問題への感度をより鋭敏にし、そのことによって表現者の精神を追い詰め、この境地に至らしめたのである。精神の激震に遭遇した時、人間は「ああ」と「おお」という言葉にならない声しか発しようが無い。表現者といえど、否、練達の表現者であればこそ、もはや「ああ」と「おお」にまさる表現はないことを痛感する。そこに成形された言葉を持ち込むことは、感情に対する冒涇でしかない。しかし表現者が表現者としての無力を感じるその原体験の瞬間は、また表現者にとって悦楽の時でもある。詩は究極的に「ああ」と「おお」を超えることはできない。ここにいたってこの確信を新たにすることが、野口に表現すべきもう一つの自己の存在をより強く意識させることになるのである。

3. 言語表現の新境の眺望と天皇

ただ、苦難の末に帰還したこの境域は、野口にとって安寧の地ではなかった。なぜなら、表現の探求者野口は、やはり言葉を見切ることではできなかったからである。言葉は古来そうした幾多の情念の躍動に淘汰、練成されてきたものであるという敬虔な実感も、野口の感覚のなかに深く食い入っていたからである。ゆえに、自己を揺るがす情動を受けとめるだけでなく、むしろそれを創成し、発信できる言葉の可能性への執着も捨て去ることはできなかった。かくして野口は依然とどまることなく言葉と情動の境界線を彷徨し、懊悩しつづけざるを得なかったのである。その懊悩の途次に野口は、言葉の枝葉をつけずに水面下に隠れている豊かな自己の存在を実感した（「水中の姿にもう一つ本黨のものがある」）。その「水中の姿」は野口にとって確たるものである。が、言葉では決して掴まえることも、いわんや伝達することもできず、言葉を駆使したとき、それは消滅するものである。

これを逃すまいとした野口は、言葉を捨て去るのではなく、言葉にかわる言葉によって自身のなかに蠢く「もう一つ本黨」の自己をつなぎ止める試行に乗り出していく。その試行が、発語するという行為を超脱して、すべてを包摂する全体を自己の外に仮構し、その全体のなかに「もう一つ本黨」の自己を投入することであった。その全体を表象するものが「大東亜共栄圏」の理念であり、その理念を体現する天皇の存在であった。その意味で、「大東亜共栄圏」の理念と天皇への帰依は行為をもってする自己表現であり、いわば全身全霊を賭けた言語表現の転相に他ならない。それは小賢しい「さかしら」を脱ぎ捨てて、本当の自己を包み込んでくれる原郷に帰還するような感覚をとまなう行為であった。

言語表現の機能的限界性を突破する手段が天皇制への帰依以外にはあり得ないか否かは、もちろん議論を要するところである。しかしながら、言語をはじめとした表現手段が究極的に対象との間にある間隙を完全には埋めきれないという原理的問題を抱えていたこと、天皇の全面的傾倒はいわばそ

うした間隙が生じる余地を絶つための窮余の行為であり、表現行為が内包する原理的問題と切り結ぶものであったことには注意しておかなければならない。天皇制が国民の表現者たちの精神を呪縛する強靱さは、彼等自身の根底に確乎として存在しながら、彼ら自身にとっても表示しかねている大切な「もう一つ本黨」の自己の救済者だったためである。

問題があるとすれば、こうした言語表現の限界を「大東亜戦争の理念」とその「体现者」である天皇への帰依をもって代位しようとしたことが、そこに至るまでの言語表現の可能性をめぐる熾烈な煩悶体験を空蟬のような空漠感のなかに放散させてしまうという問題である。これは、自身が戦争に向き合った記憶が脳裏に着床しないことを意味し、ひいては戦争責任の意識の未成熟性を決定づける（この天皇制と国民の戦争責任の未成熟性の相関関係については、後述したい）。

こうした姿勢は、戦争表現、さらには彼らの戦争に対する感覚にさらに深刻な影響を残すことが避けられない。それは、天皇の存在や意向と戦争の遂行を関連づけようとするかぎり、戦争が「無垢で清浄な天皇の意思」に発する清冽な創造力の根基であるかのように美化されてしまうということである。言うまでもなく、現実の戦争は幾多の凄惨な残虐行為を敢行し、さらには人的・物的被害といった具体的惨禍をもたらすものである。戦争に関するプロパガンダは、多かれ少なかれ、そうした現実を隠蔽しようとするが、戦争遂行の動機を天皇の「清浄」な大御心と関連づけることは、戦争を未曾有の創造的行為として極度に抽象化し、観念化してしまうのである。

そうした感覚を高村光太郎は、「戦いにきよめらる」と題した詩に次のように表現している。

戦いにきよめらる 高村光太郎
神よさしたまふ戦は
われらの生活を一新する。

もう貧富の分ちもわれらに無い。
私欲のあがきは恥となった。
この世の禍のいちばんの土臺石、
頑とした利己の影もうすくなくなった。
一切の見えは愚かしく
かくれた企らみは唾棄せられ
ありのまんまの性根をさげて
ただ、大君のまけのまにまに
深く遠い一途の生活に向へる世が来た。
かちな俗念の何にもいらぬ
かういふ世界はせいせいする。
まことに神のよさしたまふ
この戦いによってわれら潔く清められ
再び年を新たにして
胸爽かに元旦をことほぐのはいい。
卑しいきのふの念慮を脱して
心すがすがしく神のみ前に立てるのはいい⁵⁷⁾。

こうした高村の詩は、あたかも戦争を「俗念」を脱して「深く遠い一途の生活」に向かうための禊ぎであるかのように表現している。天皇の存在原理と同位化することによって、戦争は歴史を背負った皇祖祖宗の末裔である天皇とともに俗塵を振り落として歴史の原点、すなわち「ただみなもにかえる」⁵⁸⁾と同時に、あらゆる旧弊を脱して「歴史の突端にいる」⁵⁹⁾という契機を一所に込めた近代日本の再創造として懲慚する内容となっている。ここで類比的に想起されるのは、清新な生气に満ちた神武創業の古（いにしえ）への「大復古」であり、爾後の開化（＝西欧文明化）の起点でもあるという双方の契機をともに「御一新」という表現に集約して民心の糾合をはかった明

治維新政権の手法である。それによって幕政は旧弊にまみれた秕政の集積であるかのごとき烙印を押されて否定された。

「大東亜戦争」を近代日本の再創造として表象することは、この明治維新時の観念操作以上の衝撃性もっていた。なぜなら、それは世界の超大国米英との全面戦争という現実を梃子に、明治新政権が創出した日本近代国家を革正する試みであることを含意するからである。

そしてこうした「大東亜戦争」の観念上の性格づけは、戦争のリアリティーのより巧妙な隠蔽でもあった。先述したように、高村も野口も、本質的には殺戮行為にすぎない戦争のリアリティーを完全に隠匿するのではなく、むしろ「(敵を)撃つ」という巧妙な表現によってその残虐性の弱毒化をはかり、それをあえて敢行することを日常的世界から尚武の世界へと勇躍する榮譽ある行為として称揚した。いわばこの^{もののふ}武士の常理を美感に変えようする試みによって、本質的には蛮行でしかない殺戮行為が^{ますらお}壮健な益荒男的行為とされてその残虐性が隠蔽されてしまう。世界秩序の一新を標榜する「大東亜戦争」の主導者として仮構された天皇への全面的帰依は、蛮行をこうした形で称賛すべき対象に変えてしまう「効果」を持ったのである。

戦時下で量産された愛国詩や戦争詩の孕む問題点に鋭く肉迫した研究として、先に挙げた今村冬三氏の『幻影解「大東亜戦争」—戦争に向き合わされた詩人たち—』⁶⁰⁾がある。ご自身も詩人であられる今村氏は、なぜ「大東亜戦争」下においてほとんどの詩人が戦争翼賛的な詩を書いたのかを解析しておられる。その事実を見過ごせば自身も咎を負う当事者になりかねないという責任感を受け止めながら、詩人としての感性を駆使してなされた検証はきわめて要所を得ており、説得的である。筆者も多くの点で啓発された。今村氏の解析は、ひとに詩人だけでなく、他の表現芸術全般に通じる面を含んでいる。

ただ筆者は、詩人たちが量産した戦争礼賛の詩は、今村氏がいわれるよりもさらに屈曲した面を含んでいたのではないかと考えている。多くの詩人た

ちは戦争賛美の詩を量産することにほとんど狂奔というほかない状態で従事した面は否定できない。だが戦争の礼賛は、戦争を抽象化せざるをえず、その美化のありかたもそれに応じて画一化しがちである。筆者は、詩人たちはそうした戦争美化が詩魂を枯らすことを認識しており、前述の益荒男的美学への傾斜は、その限界を自覚したがゆえの転位であったと考えている。それは戦争のリアリティーを隠し切れるものではないという見切りを前提に、そのリアリティーを弱毒化するとともに、あえて日常世界の倫理的制約を踏み越えて、敵の殺戮という蛮行に手を染めることを本懐とするようなデモニッシュな自己犠牲の美学の擁立でもあった。そこにはもちろん戦況の悪化が背景にあったと思われるが、これは明らかに戦争美化の基調変化であった。

そこに至るまでの経緯については、上述した通り、深刻な葛藤を含んでいたが、本来感性の鋭敏な彼らは、そうした蛮行の美化は、いかにしても芸術の死であることに内心では気づいていたのではないであろうか。殺戮行為に関与する後ろめたさは、いかに天皇制への全面的帰依と一体化した「いくさ人」の美の揚言によっても消去できるものではないが、天皇との同位化はその「後ろめたさ」を緩和する窮余の策であった。

しかしながら、もはや天皇制への帰依をもってしてもかろうじてなし得るのは、緩和だけである。それを自覚しながら、戦争の美化に邁進した彼らの心中を支配していたのは、不気味なシニシズムである。

戦時下において明白な抵抗詩を書くことは不可能であった。そうしたどうしようもない状況のなかで、一部の例外を除いて、多くの戦争詩の表現が硬直化し形骸化していたにもかかわらず、そこに断腸の思いを押し殺しているような形跡が窺えないのは今村氏のいわれる通りである。氏はそこに多くの詩人達の間抵抗精神が根本的に不在であったことを嗅ぎ取り、それに鋭く肉迫しておられる。たしかに今村氏の言われるように、これら詩人たちの創作姿勢のなかに抵抗精神を嗅ぎ取ることは困難である。

だが詩人たちは表現者としての自身の惨状に何も痛痒を感じていなかったとは思われない。あるいは何も感じないほど良心も感性も鈍磨していたわけでもない。戦争礼賛詩の大部分は、詩魂の枯れた画一的な言葉の羅列にすぎない。そうなった理由として、戦時下において急遽詩人たちの美意識が麻痺しはじめた、ないし表現の技量が急速に低下しはじめたとは考えにくい。それは詩人たちの自覚のうえでの行為であったと見なすのが自然であろう。それは諦観というべき境地とはまた別である。諦観であるとするれば、あのように積極的態度で戦争礼賛の詩を量産するとは考えられない。

詩人たちが積極的姿勢（に見えるもの）を示したのは、詩人たちも心の奥深い部分では全霊を投じるに値しない空虚な行為であることを感知しながらも、あえてその「再創造」に帰無してみせることによって自身を悩ませてきた言葉という「さかしら」の臨界的に立ち至るような不気味な快感に駆られたためではなかろうか。そこには芸術的死を賭して全体へと帰無していく自己を眺めているもう一人の醒めた自己がいる。そうした彼らにとって、「大東亜戦争」への「熱狂」は、終わってみれば自己の脳裏に累積する経験としての実質感のない、白日夢のようなものではなかったであろうか。

しかし、これはあくまで芸術家（詩人）の精神の内情であって、戦争を賛美した結果に変わりはない。しかし筆者がこの点にこだわる理由は、敗戦後の彼らに挫折感や悔悟の念が希薄である理由がここに由来すると考えるからである。盲信からであれば敗戦後に自らが陥っていた迷妄を恥じる感覚が生まれる余地はあるが、こうした意識に駆られていたのであれば、敗戦後にその行為を、目的論的な行為として対象化できるような感覚が生まれにくい。多くの文化人たちがこれを克服しようという確乎とした意思を示さなかったのは、反省を向けるべき経験を対象化できなかったためではないであろうか。

これは、後に述べるように、敗戦後の国民文学の形成を阻害する要因として作用する。なぜなら、敗戦後の国民文学（文化）形成は戦争協力への反省

を共通の精神的基盤にすることが避けられないにもかかわらず、白日夢のような感覚でなされた空虚な戦時国策への協賛は反省を向けるべき経験として対象化できないために、国民文学の精神的土壌にしようがないからである

しかし対象化が困難な白日夢のようなその傷痕は、詩人をはじめとした芸術家たちの心底で執拗に疼きつづけた。敗戦後において彼らは、その疼痛を感じつづけながら新規の文化創造に乗り出すことは困難であることを自覚しながら、その病根を対象化する術を見出せないまま、国民文学形成の要請に翻弄されつづけたのである。

この点はまた国民文化論を論じる段階で再度触れることになるろう。

Ⅲ. 擬態としての「連帯感」の共有と「国民文学」の流産

前節でみたように、開戦が「大義」として意義づけられてゆくに際しては、「無私性」をその存在原理として標榜できる天皇の「決意」という形式を踏んで開戦が宣告されたことの「効果」が大きかった。それとともに、この「決意」を国民が「爽快感」をもって受け入れた理由としては、そこに至るまでに国民の精神状況を大きく規定してきた次の二点を押さえていおかなければならない。

第一に、ナショナリズムの分化と断層である。時々の政府が統治の道具としてしばしば利用したナショナリズムは、実践的な要請に応じて時に排外色を強めることもあれば、国際協調主義の方向に傾くこともあり、その性格は流動的であった。これに対して、国民によって擁立されたナショナリズムは、多くの場合政府批判をとまっていたこととも相まって、対外強硬論に傾きやすく、排外主義の方向に過激化する傾向が時に顕著であった⁶¹⁾。この点において、長期的に見れば、国民の間には日米開戦に同調する思潮の素地が形成されつつあったといえよう。それが前提としてあればこそ、対米戦争の完遂という共通目標が設定されたことは、国家と個人の間には避けようもなく含

まれていた不協和音や断裂をあたかも一掃するような「爽快感」を国民に与えたということである。

第二に、日中戦争の膠着状態に直面しつづけたことによる手詰まり感が、日米開戦に打開をもとめる機運を醸成したということである。それに加えて、日中戦争の軍事的膠着状態のなかで蔓延しつづけた手詰まり感は、国民の間に無為に中国を追い詰めているのではないかという後ろめたさの意識を呼び覚ましていくことになった。アジア諸国の「救済」と「共栄」という戦争目的の高唱にもかかわらず、日本以上に西欧国家の圧力に晒されてきた中国に向けて軍事行動を継続することには、アジアにおける同憂の隣国を攻撃する後ろめたさの感覚を当初よりともなっていた。この点に関して中国文学者の竹内好（1910～1977）が、開戦直後に匿名で執筆した「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」で次のように述べていたことを再度引用しておきたい。

わが日本は、東亜建設の美名に隠れて弱いものいじめをするのではないかと今の今まで疑ってきたのである。（中略）支那事変に道義的な呵責を感じて女々しい感傷に耽り、前途の大計を見失ったわれらのごときは、まことに哀れむべき思想の貧困者だったのである。（中略）

東亜から侵略者を追いはらふことに、われわれはいささかの道義的な反省も必要としない。敵は一刀両断に軌って捨てるべきである。われわれは祖国を愛し、祖国に次いで隣邦を愛するものである。われわれは正しきを信じ、また力を信ずるものである。

大東亜戦争は見事に支那事変を完遂し、これを世界史上に復活せしめた。今や大東亜戦争を完遂するものこそ、われらである⁶²⁾。

日中戦争下で公言する機会を奪われていたこの感覚は国民心理の辺隅に沈淪しつづけ、戦況の泥沼化とともに濃度を増しつづけた。

この条件の下で、西洋国家に同調してアジアに対抗的に向き合いつづけることも、逆に西洋に対抗するために、アジアの一員として中国と等列化されることも許容できないという隘路がさらに深刻化し、その出口が見出せないことへの苛立ちが国民の間に鬱積していった。

開戦の詔書（正式には「米国及英国ニ対スル宣戦ノ詔書」）は、こうした手詰まり感の抜本的清算を予感させる「裁定」として多くの国民に受け止められたことが重要である。中国を攻撃することに後ろめたさを拭いきれなかった国民にとって、重慶の「残存政権ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムト」し、「与国ヲ誘ヒ帝国ノ周辺ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝国ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ与ヘ遂ニ経済断行ヲ敢テシ生存ニ重大ナル脅威ヲ加」えようとしている西欧の大国である米国に対して戦端を開くことは、以下の事例が示すように、積憤を晴らし、良心の呵責に苛まれることなく全力を投企してあまりある痛快事だったのである。

この点に関して、竹内好以外にも、前出の東畑精一（農業経済学者、1899～1983）は、「満州事変以来の十ヶ年、支那事変の過去の四ヶ年有余。問題は何れも世界史の規模では最後の解決に至らず、また益々強く世界史の課題となって来ている。また之等は—今日に於ては斯く云うことが許されるであろうが—「事変」なる文字が示しているように、なんとなく一種のわだかまりをもっていた」⁶³⁾と述べていた。

さらに日中戦争に積然としないものを感じればこそ、日米開戦を痛快事と感じた論者は以下の加藤武雄（小説家）、豊島興志雄（小説家、翻訳家）、平生鈺三郎（実業家、文部大臣、教育家）など、枚挙に暇がない。

加藤武雄（1888～1956）

正直のところ支那とは戦い度くなかった。同文同種の国、歴史的、経済的、文化的のいづれの方面から見ても、畢竟運命を一にすべき国、こ

の日支両国の相戦うことは所謂兄弟牆に闘ぐことであって、支那事変はまことにアジアの悲劇であると私共は考えております（大東亜文学者会議〈発会式 11月3日～5日帝国劇場〉での発言）⁶⁴⁾

豊島興志雄（1890～1955）

日本がなしつつある戦は、英米を相手にすることによって初めて、聖戦たるの基礎が明瞭になった。固より、「支那事変」に於ても、当面の敵の背後には、常に英米があったとは云へ、それを聖戦だとする直感には一理論ではなく直感には一何か割り切れないものが残った⁶⁵⁾。

平生釧三郎（1866～1945）

われわれは五年間支那事変を戦ったのであるが、それは英米の傀儡たる蒋介石政権を敵とするものであって支那民族に対しては何等の憎しみも敵愾心も感じないのであるが、今頃の戦いこそは英米の金権的支配を領土的野心を植民地的搾取を徹底的に打破り、傲岸不遜なるアングロ・サクソン民族を完膚なきまでに叩きのめさねば已まぬという民族的な敵愾心が盛り上がっている⁶⁶⁾。

引用に明らかなように、豊島は日米開戦以前においては中国の背後に英米がいるということを説明されても、中国への軍事侵攻を「聖戦」とは了解しがたかったが、日米開戦の報に接するや一転して英米への軍事行動は「聖戦」と違和感なく認識できるという心情を直裁に吐露している。この感覚は、膠着状態がつづいている中国との軍事対立の決着の目途がたたないという重苦しい事実を前提として生じた感覚であった。

これとやや位相を異にして、平生釧三郎は、蒋介石政権と「支那民族」を区別しつつ、蒋介石政権の背後にいる英米を打倒することなしには蒋介石の圧伏は望みがたいとして、日本がそれに向けて踏み出したことに対する昂揚

感の高まりを率直に語っている。

ここに見られるのは、裏面にいる黒幕ともいべき「真の敵」に照準を合わせたことによって、その打倒はこれまでの英米主導の世界の旧秩序の一新につながるという期待と、そしてその「大業」は帝国日本の双肩にかかっているという矜持から生まれた興奮である。こうした「大業」を阻む敵の強大さと、それと戦うことに要する国民の自己犠牲など予想される艱難は、むしろ国民にとっては戦争目的の「道義性」の高さの証として受けとめられ、それに関与していく昂揚感を煽るものだったのである。

こうした背景があればこそ国民は、西欧の超大国である米英両国との戦争(→全面戦争)を日本が中心となって決行するということが、天皇を介して国家の「決意」として公的に表明されたことに覚悟を新たにした。国民にとって、「開戦の詔書」という形態でラジオ放送を通して表明された「天皇の決意」は、自らの積憤を国家が着実に受けとめてくれたことを意味したのである。

前述したように、日本近代史上において、これほど大規模に「国民の意思」と「天皇の決意」との間に直接的な通約関係が成立したこと前代未聞であった。ここにおいて国民にとっての天皇の存在感は急浮上するとともに、このように「天皇の決意」に仲介されることによって、国民はそれまで遠く、茫漠とした感覚で向き合っていた「国家の意思」に感応し、それに呼応していく覚悟を固めたといえよう。

このようにして、一新された新しい環境のなかで「天皇の意向」に付き従うことによって命運をともにする一体感にひたるような感興は、あたかも自らの後ろめたさを麻痺させるような感覚をともなって、国民各層の意識を席卷していった。文学者島木健作と哲学者西谷啓治(京都帝大教授)は、その感慨をそれぞれ次のように記している。

宣戦の大詔を拝し奉った瞬間の自分は、総身がふるへるような厳粛な

感動のなかに、なんともいへぬ明るさ、いよいよ事は決したといふ落ち着きと安心とを感じた。ラジオの前の自分の頭は自然に垂れ、眼には涙がうかんだ。しんとした勇気が腹の底にみなぎってくるのを感じた。

妖雲を排して天日を仰ぐ、というのは実にこの日この時のことであった。一切の躊躇、逡巡、遲疑、曖昧といふものが一掃されてただ一つの意味が決定された。瞬時にしてこの意志は全国民のものとなったのである。眇たる自分のごときもののこの偉大な時に際会しての生くる道もこの意志の下に決定されたのである。

日暮れ前に私は外に出た。この静かな町の道行く人々の顔にも決心のいろがあらわれていた。行きずりに逢う人がたがいに見交わす眼には、話しがたいような、親しげないろがあった⁶⁷⁾。

去る十二月八日に国民の誰もが経験したところの、異常な緊張と心の底から起こってくる深いがすがしさと錯綜した気持、それは恰も烈しい雷光と同時に今まで低迷していた鬱陶しい暗雲が裂けその奥に青空を見るような感じであったが、あの感動は何を意味したであろうか。一応それは、凡ての重大な決断に伴う感情として解することも出来るであろうが、然し実はそうだけでは尽さない意味を含んでいたと思う。第一に、決断は国家の決断であり、その決断が国民の各人に、恰も彼自身が決断をなしたかのような気持を起させたのである。そこには、国家の意思と国民の一人々々の意志との合一が、いわば冗然と現れたのである。吾々は、ヘーゲルが普遍的意志と主観的意志との合一として思弁的に考えたものを、現実の世界のうちに躍動する生きた姿に於て体験した。それは国家と国民の「呼吸が合った」ともいうべき躍動であった。そしてその躍動のうちを、恰もそれに眼目を与えるかのように、大詔が響き渡ったのである⁶⁸⁾。

ここで表明されている開戦に対する島木、西谷の感興は小説家、哲学者独自のものというより、むしろ開戦時の国内機運に直裁に同化したものである。爾後の戦争の意味づけは別にして、突然の開戦の報に直面した時の感慨は、小説家、哲学者も一般民衆と大差はない。あるとすれば、彼らは国内機運をより鋭利に捉える表現力に長けていたにすぎない。

ここで島木が「宣戦の大詔を拝し奉った瞬間」に、「総身がふるへるような厳粛な感動」に浸っただけでなく、そのなかから「なんともいへぬ明るさ」とともに「いよいよ事は決したといふ落ち着きと安心」とが沸き上がってきたと述べていることに注目しなければならない。それは「一切の躊躇、逡巡、遲疑、曖昧といふものが一掃されてただ一つの意味が決定された」という爽快感と表裏一体であった。この爽快感、島木が「瞬時にしてこの意志は全国民のものとなったのである」という通り、理性や認識を超えて奔流のように広汎な国民を一気に捉え、その心情を宰領した。

この連帯感「この静かな町の道行く人々の顔にも決心のいろがあわられて」おり、「行きずりに逢う人がたがいに見交わす眼には、話しがたいような、親しげないろがあった」と表現されているように、国民全体が同等の感慨に浸っていることを改めて相互に確認し合いたいような思いであり、決して国民個々の独立した思いが結集したという種類のものではない。重要なことは、開戦直後に国民全体を席卷したこの感懐は、個々の国民から内発的に湧出したものが結集したのではなく、あくまで国民から超越した天皇によって「ただ一つの意味」として決定され、それゆえにこそ「瞬時にして」全国民の感慨を触発し共有されたということである。個々の国民の内発的意思なら、たとえそれが同時に発生したとしても、かくも瞬時に相和することはあり得ない。これは上述した共通の背景と、天皇という超越的存在の「決意」が託宣の如く挙示され、個々の国民がそれに瞬時に感応したことによるものであることを見逃してはならない。この意味で「一切の躊躇、逡巡、遲疑、曖昧といふものが一掃されてただ一つの意味が決定された。瞬時にしてこの

意志は全国民のものとなったのである」という島木の観測は的確である。国民の「連帯感」は、「天皇の決意」に瞬時に感応した国民がそれを相互に確認し合い、その感応の共有に発する感興が個々の国民の胸中を支配した結果なのである。

さらにこの天皇の「決定」への国民の瞬発的感応は、今上天皇の存在を皇祖祖宗の末裔として掲揚する姿勢に呼応して、その「決定」があたかも連綿とした時間的連続性に立脚した歴史的決断であるかのごとき幻想に支配された陶酔という性格をも合わせ持っていた。開戦決定を天皇の名で宣告したことは、その「決定」を受け入れる国民をこうした陶酔に誘う「効果」を発揮したのである。

哲学者の西谷啓治は、この天皇の介在が触発する陶酔が紐帯となって国家と国民の意思の合一化が成立していることを見通していた。すなわち、12月8日に国民が経験した「異常な緊張と心の底から起こってくる深いすがすがしさと錯綜した気持、それは恰も烈しい閃電と同時に今まで低迷していた鬱陶しい暗雲が裂けその奥に青空を見るような感じ」は、「国家と国民の「呼吸が合った」ともいうべき躍動」ゆえであるとする認識がこれである。「ヘーゲルが普遍的意志と主観的意志との合一として思弁的に考えたもの」が現実的に体験される場合、思弁を超えた契機に助けられることなしにはあり得ないことを西谷は改めて再確認しているといえよう。

そして「その（国民の—引用者）躍動のうちを、恰もそれに眼目を与えるかのように、大詔が響き渡った」という西谷の観測どおり、「大詔」が「眼目」を与えるかのごとき作用をしたことが劇的に国民の心底を揺さぶったことを見逃してはならない。もちろん「大詔」は、国民の心底にないものを擦り込んだり、また搾出したりするわけではない。にもかかわらず、「天皇の決意」は国民の覚醒を促し、その情念に方向性を与えることによって、国民精神を一挙に結集させる効果を発揮したのである。

では、「天皇の決意」は、国民に内在していたどのような情念を揺さぶり、

共鳴を引き出したのであろうか。ここにいたって、近代日本によって彫琢された国内思潮に対する「大東亜戦争」の求心力はいかなる点にあったのかを改めて検証する必要がある。それは以下の点にあった。すなわち、「大東亜戦争」の理念は、それまでの近代日本の基本姿勢であった「脱亜入欧」が日中戦争下において「攻亜脱欧」に転じつつあった思潮変化を経験していた国民にとって、さらなる勇断を要する「攻欧」という禁域へ踏み込むことによって反転的に「興亜」を成し遂げるという「大業」を慫慂するものと映じたことがこれである。これは多くの国民にとって「入欧」によってしか「脱亜」をなし得なかった近代日本の大きな転生と勇躍の好機と受けとめられた。これに関して小説家の伊藤整は、12月8日の「日記」に開戦の報を耳にした「感想」として、「我々は白人の第一級者と戦う外、世界一流人の自覚に立てない宿命をもっている。」⁶⁹⁾と記している。この「宿命」という表現のなかには日本の置かれた上記の政治地政学的な特性への存念が込められている。

国民にとって英米打倒への決意表明は、まさにこの「宿命」を受けとめて禁域とされてきた「攻欧」という未踏の境域へ天皇とともに深く踏み込むような感覚を振起されるものであった。その結果、この「大業」をなし遂げるにはこの「好機」を逃してはならないという感覚が国民心理を席卷し、「後戻りはできない地点に立ち至った」という覚悟の共有がもたらす凜烈とした緊張感に国民の多くが浸りつつあったのが、開戦当初の国内思潮の大勢であったといえよう。それまでの国民個々の思想的来歴や階層差を超えて、国民がこぞって「新境」に向かって突き進む覚悟と一体感を共有していることを肌で感じた感概を小説家伊藤整と、同じく小説家で1938年に治安維持法違反で検挙され翌39年出獄した青野季吉はそれぞれ次のように述べている。「十二月八日の昼、私は家から出て、電車道へ出る途中で対米英の宣戦布告とハワイ空襲のラジオニュースを聞き、そのラジオの音の洩れる家の前に立ちどまっているうちに、身体の奥底から一挙に自分が新しいものになった

ような感動を受けた。(中略)私は急激な感動の中で、妙に静かに、ああこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まったのだ、と安堵の念の涌のをも覚えた。(中略)方向をはっきりと与えられた喜びと、弾むような身の軽さとがあって、不思議であった。(中略)やっと、自分の心ひかれる方向を見定めた⁷⁰⁾。「いよいよ来るべきものが来たのだ。(中略)無限の感動に打たれるのみ」⁷¹⁾。

ここで伊藤が吐露している「方向をはっきりと与えられた喜び」は、日本が西欧の「計略」によって不条理な孤立を余儀なくされながらも、その孤立に怯まなかったことがいま報われようとしているという感慨と表裏一体であった。ここから、日本が西欧の後ろ盾を頼まない「アジアの盟主」になることが、アジアの真の「救済」の前提条件であるという観念が国民的規模で流布していく。国民は挙って真剣になれる対象をここに見出した。それはあたかも「天皇の決定」につき従うことによって自身が浄化され、無私になれるような未知の昂揚感をもとになっており、その昂揚感を共有することで、国民であることを実感できるような体験であり、それはまさに「一身独立して一国独立する」(福沢諭吉)という、それまで理想とされてきた国民と国家の相関感覚とは逆の感覚に根差した体験であった。

以上の点を確認した上で、ここで少し踏みとどまって考えてみたいのは、開戦に際会した文化人たちの昂揚感の底流に空漠感があったことは前述したが、では一般の民衆においては、こうした高揚感のなかで日米開戦が本当に衷心から自己を投企すべき目標なのか否かという点に関して一点の疑問も存在しなかったのかという点である。

決してそうではなかった。多くの一般の民衆も、世界の超大国との開戦に、心底では「これからどうなるのか」、あるいは「本当に大丈夫か」という言明できない懷疑や恐れは当然存在した。それを拭えなかったがゆえにこそ、むしろそれを押し殺すために、不可逆の方向に全員で向かうことの高揚感にあえて身を委ねる心裏が働いていた。大多数の知識人も一般の民衆も、そう

した言明できない不安とつねに隣り合わせであり、むしろそうした危惧を封印することに腐心していた。こうした一般の民衆に対して、彼らがそのなかに溶け込めるような「全体」の発見と再創造に尽力したのが、知識人たちであった。

文芸評論家である前出の河上徹太郎が、「生きること、見ること、働くこと、すべてが一人の人間の中で一つになり、更にこの一つが一億の国民を通じて一つであるという状態」⁷²⁾、すなわち個々の国民が全体を生きることの重要性を力説しているのも、この点と関係があった。戦時下全般を通してこうした状態が継続することが、国民を飲み込みかねない恐怖感の表在化を未然に防ぐために必要だったのである。

そうした恐怖感と共存していた知識人の多くは、平和への願望が頭をもたげるとは戦争目的への集団陶酔から国民を覚醒させる糸口になりかねないという危惧を共有していた。河上が「混沌暗澹たる平和は、戦争の純一さに比べて、何と濁った、不快なものであるか！」(同前)というように、平和を人間の心を濁らせる不健全なもののごとく痛罵してみせたのはこのゆえに他ならない。そして「生きること、見ること、働くこと、すべてが一人の人間の中で一つになり、更にこの一つが一億の国民を通じて一つであるといふ状態」⁷³⁾を保全すべく、すべての国民がそれぞれの持ち場において戦争のことだけを考えて無心に戮力する状態だけが、平和への願望が台頭する素地を生まない状態として理想化されなければならなかったのである。国民の幸福は国民自身が残心なく本務に専心できる状態であり、平和はそれをかき乱す条件であるとして、戦時下における危機と同居した国民生活を理想化する巧妙な観念操作をここに見て取ることができる。

こうした状態は、すべての国民が「ものを見る眼の純一さを獲得した」証しと意味づけられ、俗陋を離れた国民相互の意識の合一化が自明の前提に据えられることにより、改めて国民的全体性は何かということを問う必要性はひとまず解消する。それは文学者にとっては「国民文学とは何ぞや、などと

いう議論はいらぬ」⁷⁴⁾ 状態の到来を意味し、文学者を長年悩ましつづけた精神的負荷を低減したのである。

戦時下において「無用の徒」と貶視されていた多くの文学者にとって、自らの存在の「有用性」を社会に承認させるためには、自らの創作活動を全国民にとって意味のあると目される「国民文学」の創造に振り向けることが必要であった。しかし、「国民文学とは何か」という問いに対して説得力のある解答を提示することは困難であり、「国民文学」の要請に見合う「全体性」を徴証できるものは何かをめぐってその探究は混迷をきわめていたといつてよい。

そうしたなかであって、すべての国民が各々の持ち場において戦争のことだけを考えて無心に戮力する状態、すなわち個々の国民がエゴや俗情を離れ無私の心境にいる状態はこうした混迷を救う局面転換であった。なぜならそれは無理な全体性を人為的に創造しなくとも、国民が自然な状態であることが即時に「全体性」を体現していると目することができる状態であったからである。この状態の到来は、「国民文学とは何か」という過酷な問いから文学者を解放する。そしてこれによって文学者は、無理な創作を加えずに日常生活（生活）を描くことが即そこに内包されている（と想定される）「公共性」の活写であると強弁することが可能になるからである。それは、近代日本の文学者が世間や政治といった「公的なもの」に対して終始感じてきた「負い目」が自動的に解消する安寧の境地でもあった。

この新境地を安定的に維持するためには、「文学の非常時的役割」を「非常時に於ける日常性といふ、女性的な面」⁷⁵⁾ に求めて憚らない自負を踏み固める必要があった。この自負こそは「今こそ全文化を目的意識と観念的規定の室から出して、凜然たる外気に当て、自然のままに生きてゆくものだけを生育せしめるよう、純粹化し、淘汰せねばならぬ」⁷⁶⁾ という強固な目的意識と連動し、それを前提に「かういう時期にこそ、文学には「文」の領域があることをはっきり認識することが出来る」⁷⁷⁾ とする矜持をうち立てることを

可能にした。戦時下の文学者の自意識は、このように戦時下における非日常を不断に繰り入れつけられる「日常性」を描くことに向けた模索とともにあったのである（もちろんこうした状態で日常性を語ることのなかに安住の地を見出したことの代償として、文学者たちはのちにその作品の創造性の欠如を酷評されることになる）。

しかし、こうした戦時下の非日常を「日常」のなかに繰り込みつけることは、旧来は必ずしもそういうことに敏感ではなかった文学者や文化人の自意識をも揺さぶり、窮地に追い込んでいくことになった。例えば徳川夢声は抱きはじめて「人生に対して何一つすることが無くなったような感じである。対米英戦争という、すばらしい事が始まって、私も一員として大いに有意義な仕事（銃後の慰安娯楽）に参加している訳なのであるが、この頼りなさは何処から来るか？自分の仕事に対する自信—この仕事は立派な仕事であるという自身—それが無いからであろうか？（中略）要するに、私の憂鬱は、私が本当の生活をしていない所から来るらしい」⁷⁸⁾といった類いの不安と憂鬱はその端緒であった。

そしてこうした類いの不安と憂鬱は、表現しようのない根源的自己を覚知し、やがてそれを描出できないのは、本当の自己を生ききっていないためではないかという懷疑と煩悶にとらわれていく詩人たちの心象（後述）と共通していた。

日常を描くことをもって国民文学の新境地の開削と僭称できる条件が生まれたことは多くの文学者に一時の安寧を与えたが、それを国民文学と僭称しつづけるためには、戦時下における日常生活がつねに虚構を交えずに描くにたる緊迫感に満ちたものでありつづける必要があった。そうでないかぎり国民文学は、急速にその緊張感を失って凡庸な日常生活の模写に頹落する。戦時体制下において相対的に平準化された国民の境遇と奉公の精神だけでは、文学的想像力（創造力）を永続的に刺激する対象にはなり得ない。この夢声の憂鬱の根底には、自分は本当の自分を生ききっていないのではないか

というという拭えない不安（「私が本当の生活をしていない」）が横たわっていたのである。

が、いくら探究をつづけても、戦時下において強靱な文学的創造力の活力源となるべき国民の内発的な精神性を探り当てることは困難であった。それは、この熱狂が、先に述べたように、激発的な陶酔の性格が強いものであることに起因していた。多くの文化人やそれに類する人々は、ここに潜む空漠感の広がりを感じ取っていたと思われる。彼らは戦時下において求められる「国民文学」の探究に苦慮しながらも、自身にとっても満足のいく「国民文学」に到達することは見通せないことに気づきはじめていた。

そうした焦慮から、多くの文化人たちは国策の先鋒となって働くことに「生きがい」を見出すように自身を振り向け、その不安を封印しようとした。従軍作家としての活動はその最たるものである（注：ここでは作品論も含めた従軍作家の活動の全容を述べる用意はない。重視したいのは、従軍作家に共通し、創作の動機ともなっていた「負い目」である）。

彼らは心底では醒めていた。しかし醒めきっていた自己と対峙することを恐れていた。例えば、皇軍慰問を依頼された徳川夢声は、興奮を隠せない態のもとに、次のように述べている。「私は感動して、引き受けた。（中略）開戦以来、大本営発表の大戦果を聞く毎に、一芸人たる私は、自己の不甲斐なさを情けなく思っていたのだ。それが、この使命を果たすことにより、銃剣以外の道で、国家に直接貢献することが出来る訳だ」⁷⁹⁾。夢声は「開戦以来、大本営発表の大戦果を聞く毎に、一芸人たる私は、自己の不甲斐なさを情けなく思っていた」と述べているが、夢声の心に宿っていた情けなさは、より屈曲していた。それは「銃剣以外の道」で国家に直接貢献することが出来ないためではなく、そうした自己を不甲斐なく思ってしまう自らに対してであった。さらに言えば、夢声の胸奥に巣くっていたのは、そうした意味での情けなさにもかかわらず、「皇軍慰問」に協力することによって自己を慰藉する以外に身の置きどころのない「自己の不甲斐なさ」の自覚に発した無力

感であろう。さらに夢声の場合それは戦時下において、皇軍慰問という形でしかその意義を実感できない自らの芸の無力さを否応なく実感させられたことに対する当惑と負い目でもあった。戦時下においては自己の持ち場で本分をつくすことが一般の民衆にとって残心なき精神の充実感を与えるという前述の観測は、必ずしも総ての国民にあてはまらないことをこの夢声の困惑は示している。

興奮気味にその「使命」を自覚し、その「使命」に殉じようとする態を装っているのは、自身が苛まれていたこの負い目を直視し、対象化できないためであろう。これは他の多くの文化人にも共通していた。だが彼らの多くはそれ以前に、それを直視し、自身の芸術家としての存在の無力さを真正面から対象化する気概と術を持たなかった。

そうであればこそ、その負い目の感覚は、むしろ自らの戦争への協力が決して受動的な追従ではなく、戦時国策への主体的協賛であるかのごとき擬態に一層徹しきることによって自ら自身をも幻惑する以外に対処の術がなかった。

それは日本の領土的膨張が東アジア諸国に福音をもたらすとともに、自身も「偉大」になれるような幻想を信じきるような振る舞いの徹底であった。次の山田風太郎の心情はこの点を鮮明に示している。敗戦時、文学に関心の深い23才の医学生であった山田風太郎（1922～2001年）は、敗戦時に戦中における自己の煩悶を回顧して次のように述べている。

（前略）吾らは、戦後の日本人が果たして大東亜共栄圏を指導し得るや否や疑いたり。（戦争には負けると思わざりき。これ確信ありて敗北を思わざりしにあらずして、これを思うは耐えがたくして、かつそれ以後の運命を予想し得べくもなきゆえに、われと目を覆いて必勝を信じいたるなり）（中略）本戦争にともかくもガムシャラに勝たば、而してともかくも大東亜共栄圏を建設して、他の指導民族と角逐すれば、これに

研磨されて島国根性は一掃され、闊達なる大民族の気宇おのずから養われんと思いたるのみ⁸⁰。

ここで山田は、自身の戦時政策への協賛は、戦争への盲目的狂奔ではなく、自己の勇躍への期待と一体化した戦争目的への自覚的投企であったかのごとく回想している。山田自身は明示的に述べていないが、徳川夢声と同様に、ここには国内が戦争遂行に向けて一丸となっている（と山田には思えた）時に、医学生とはいえ、自身は直接何の寄与もできていない「無用の徒」にすぎないという負い目が作用していた。

この時期、日常生活のなかでも戦争指導体制への協力を強いられた国民の心情は、温度差はあれ、それを国民（「臣民」）としての当然の責務と受けとめ、心底にある不安や懐疑を押し殺して順応することを疑問視すまいとする徴候が大半であった。こうした国民が大挙出現した状況を前にして、知識人のなかには、自身が採るべき姿勢と倫理観や自我との間に深刻な葛藤を抱く者が多かった。しかし現実的に戦時政策に対して抵抗する術を奪われ、順応する以外に選択の余地がなかった八歩塞がりのなかで、自らの戦時政策への協力を、強いられた受動的協力ではなく、自らの主体的協力であるかのごとき擬態をとることによって自らの葛藤や負い目を緩和しようとする者が少なくなかった。その典型的な手段が、山田のように国家の膨張に重ね合わせて自身の勇躍を仮想し、自らの協力姿勢を自身にとって意味あるものとして納得させることであった。

だがここには、なお根本的な限界があった。なぜなら、自身が内発的かつ能動的に抱いた「大義」が戦争の性格に投影されるのを明確に実感出来ないかぎり、こうした「参画」の意味づけはどこまでいっても事後的に案出した自己了解にすぎないという感覚を払拭しきれないからである。上記のような戦争協力姿勢をいかに自身の「壮意」の上に根拠づけ、それを「大義」と僭称しようとも、そこには擬態ゆえの蔽いきれない虚勢の臭いを隠せないの

は、このゆえに他ならない。以後、大半の知識人の戦時政策への対応は、自身も含め国民的規模で存在したこの種の自己欺瞞との戦いであったといっても過言ではない。多くの知識人が日米戦争を「聖戦」としての「大東亜戦争」へと観念的に再創造することに腐心したのは、こうした自身の負い目を低減するためであった。その際に、彼らが苦慮したのは以下の点であった。

それは、大東亜戦争を「聖戦」として合理化しようとするれば、その「例外性」を言挙げすると同時に、その「普遍性」を押し出すという両立しがたい課題の両立を図らざるを得ず、その両義性が天皇の位置づけの混迷をもたらすという悩ましい背理への逢着がこれである。すなわち、日本のアジア進出と対米軍事行動をとともに遂行する正当性を得るためには、それらを西欧諸国一般の貪婪な帝国主義的領土拡張とは異なった原理の上に根拠づけなければならない。そして日本の対外軍事行動を西欧のそれとは無縁のものとして合理化しようとする際に否応なく直面せざるを得ないのは、それを「歴史の必然」に準じたものとして根拠づけるか、それとも逆に「歴史の必然」を超越する「壮挙」として例外化するかという難題である。

「例外性」を強調するなら、「歴史の必然」に拘束されない超越的壮挙として合理化するほうがその「例外性」の挙証として相応しい。一方、その「普遍性」を標榜することに力点を置くなら、歴史的必然に準じた「義挙」として根拠づける方がその要請にかなう。

戦時下の文化人たちは、この双方の契機を盛り込める包括的な戦争合理化を試みざるを得なかった。だが、その作業は、当初の企図に反して、双方の課題の要に置かれた天皇を後景に退かせることになった。

なぜなら、「世の中には、今回の米英膺懲の自臬を以って、恰も一種の奇蹟であり、晴天の霹靂であるが如く思ふ者があるが、徐ろに我が三千年来の歴史を辿って考察すれば、正に斯くある可き場合に、斯かる事が出来たものであって、何等不思議でも無く、意外でも無い。謂はば有る可き事があつたといふに外ならない」⁸¹⁾ というように日本の軍事行動を「歴史的必然」へ

の準拠として理念化すれば、論者の思惑とは別に、天皇は「歴史的必然」に準じた関数的存在にとどまってその主体性を揚言できず、逆にその行為を「歴史的必然」を超越する主体的「壮挙」として掲揚すれば、それを敢行した天皇の「例外性」を「普遍性」に接合することに改めて苦慮しなければならないからである。これは天皇を、国内のみならず、「大東亜共栄圏」という広域秩序の創造主体に仮構しようとするかぎり、必ずつきまとう陥穽であった。こうした意味において、「大東亜戦争」の過程で天皇の存在は大きな背理を露わにしていく。

このほかにも、「大東亜戦争」の過程において天皇は、戦時体制の要請に見合う国民の緊張感を日常生活のなかで持続的に喚起するという難題を背負っていた。詔書という形態で天皇の開戦への「決意」が国民に向けて表明されたことは、この「効果」を狙ったものであった。それは、開戦当初は国民の興奮を掻きたてるのにかなりの「効果」をもったことは先述した通りである。

しかし、この点でも天皇の「決意」の作用には限界があった。なぜなら、それは国民の興奮を瞬時に喚起するのに有効な反面で、戦時政策維持に不可欠な緊張感を持続的に与えつづけるに十分なものではなかったからである。戦争を日常化することは、現実には極めて困難であったという他はない。この点を克服するためには、国民の精神的傾倒を持続的に喚起しつづけられるような戦争の明晰な意味づけが求められた。そのために必要だったのが、もはや「天皇の意思」を最重要の要件とはしない戦争指導理念であった。この課題に対応しようとしたのが、「近代の超克」論に他ならない。それは「天皇の意向」を一端後景に押しやる論議となった。

では、それはどのような戦争指導理念であったのか。だが、それについて述べるのはもはや本稿の範囲を超えている。

むすびにかえて

本稿は筆者が研究をすすめている「天皇制と『大東亜戦争』関与の精神構造」研究の第一部に相当するものであるが、今回、独立させて一箇の完結した論稿にまとめた。さらに本論を掘り下げていくべきではあるが、紙幅の関係上、ここで擱筆せざるを得ない。第二部・第三部については別稿を期したい。

本稿で述べた天皇と国民の負の共依存の残穢を徹底的に洗い出す以外には、戦後民主制の進展はありえない。問題は天皇個人の資質や行動様式ではない。あくまで重要なのは、天皇という存在がいかなる国民の情念を触発するのか、そしてその意思の表明のあり方と自意識をいかに規定するのかという問題である。

戦時下においては、そのあり方の問題性が鋭利な形で表在化した。それは戦時国策への協力を強いるために、国民の自己が抑圧される戦時体制下においてこそ、むしろ自己が水面下で肥大化し、その結果、仮象としての自己に対する違和感が平時以上に昂進するためである。強固な自己から発する濃縮した言葉を駆使する詩人においては、この葛藤はきわめて深刻であった。一般の民衆においても、詩人ほど鮮烈ではなくとも、この葛藤は存在した。詩人の葛藤のなかには、この全国民的規模での葛藤が凝縮されている。

近代日本における国民文学の蹉跌は、この葛藤を天皇との一体化によって処遇したことと相即していた。そしてそれは、戦後民主主義の桎梏でもあった。本稿は、この点の分析を深めるための序論的考察に他ならない。

以上の点を踏まえた上で、なお重要なのは、国民の熱狂が擬態であったことである。本論で強調したように、開戦当初、国民も、日中戦争には違和感を抱いていた知識人たちも、未曾有の「爽快感」と「開放感」を抱きながら、ほぼ無批判に日米開戦を支持した。そこには、開戦が天皇の「決意」として表明されたこと、さらには彼らの日米開戦の性格についての認識が作用して

いることも指摘した。

だが一方で、そうした「熱意」は米英に対する電撃急襲と緒戦の「戦果」が前提であったことを見のがしてはならない。それを示すのは、かれらの戦争支持の「熱意」は、長くは続かず、1943年にはいると戦局の悪化とともに冷めていくことである。それは当時の雑誌の誌面をみても明らかである。むしろ1943年中葉以降は、いかに国民の戦争支持を恒常的に取りつけるかに腐心したものが多し。

ここから分かるのは、以下の点である。ここから先は次稿での議論になるが、ごく簡単に見通しを述べて、むすびに代えたい。

第一に、「開戦の詔書」という形で表明された天皇の「決意」は、瞬時に国民の意識を貫く穿孔力を備えていた反面で、戦況の悪化という苦境のなかにあっても国民の戦意を喚起しつづけるだけの持続的な触発力を欠いていたことである。旧著で明らかにしたように、「天皇の意思」は、王政復古や終戦の決定など他の政治勢力では不可能な新展開の創出に有効である一方、爾後の事態を統御する持続的効力を本来備えていないため、何が（どの勢力が）「天皇の意思」を代行するかということがつねに問題にならざるを得なかった⁸²⁾。開戦以後の顛末についても、同様のことが当てはまる。

第二に、国民の「戦意」が持続力を欠いていたのは、国民が衷心から戦争目的と戦時政策に傾倒していたのではないという問題である。国民の開戦時の熱狂に偽りがあったというのではない。ここが微妙なところではあるが、国民の開戦時の熱狂は激烈ではあっても、深度を欠いていた。なぜか。それは、国民が内面から戦争目的に傾倒していたのではなく、「国民」としての本分に照らして戦争目的に共鳴しなければならないという感覚に支配されていた側面が大きいからである。本論中では詳しく展開していないが、国民にそうした「持ち分意識」を与えることによって一般の民衆を「国民」に引き上げ、その代償として「国民」に応分の「義務」を自覚させたのは、天皇制というきわめて虚構性の強い権力システムである。

国民の意識レベルにおいて、内面からの傾倒と義務としての共鳴の区分は鮮明ではなかったが、本質的には国民の姿勢は擬態としての性格が勝っていたといえよう。擬態であることは、真剣ではないということを意味しない。むしろ逆に、擬態であればこそ、非国民と見られてはならないという強迫観念に駆られる側面が強く、パフォーマンスは激越にならざるを得ない。ここに、奉公の「真剣度」を競うパフォーマンスの競合が生まれる。そしてパフォーマンスであればこそ、その底割れを恐れて、それに同調しない、あるいは同調しない気配の察せられる者を排斥することによって自らの「真剣度」を拳証しようとする集団ヒステリーのような状態が現出する。

国民の戦争目的への傾倒が内発的なものであるならば、敗戦後において大部分の国民が戦争目的に同調したことに対する悔悟の念や慚愧の意識、もしくは自らを欺いた権力に対する憤怒が見られるはずである。ところが、敗戦後の国民の機運の大勢は、自らの過ちを悔いる意識も、自らを欺いた権力に対する批判精神も、ともに希薄であったとしかいいようがない。国民の間に支配的であったのは、戦争の記憶を忘却して、何事もなかったかのように日常の安穩を求める姿勢である。

なぜ、そうした姿勢が大勢になるのか。それは国民が自らの戦時中の振る舞いに後ろめたさを感じているからである。自らが衷心から傾倒した戦争ならば、そこにはいかなる形態であれ、感情の激震が見られるはずである。しかし、一部の国民を除いて、そうした傾向は見られない。それは一見強固にみえた国民の戦争支持の姿勢が、国民の本分に照らした同調という感覚のものであったからである。内発的傾倒ではなく、同調という性格のものであったかぎり、悔恨すべき主体的誤りとして対象化しにくい。また同調したかぎり、権力に対する批判の刃を向けにくい。その隘路のなかで国民がとった選択が、自らの過去を記憶の底に封印し、忘却の態を装うという自己防衛だったのである。

もちろん過酷な戦争の惨禍に晒された国民の多くは根づよい厭戦感情を

抱いていた。しかし、残念ながらそれら厭戦感情は、自覚的な反戦意識や権力批判につながる回路を国民自らが封じてしまっている。

この擬態に塗り固められた過酷な現実が敗戦後の原点にあり、それが今日をも拘束していることを見据える以外に、戦後民主主義の進展はありえない。本稿はそれに踏み出すためのささやかな試みに他ならない。

註

はじめに

- 1) 長与善郎「大東亜戦争における建設理念」(『中央公論』巻頭言 42年3月)。
- 2) 斎藤茂吉「開戦」(『文芸』1942年1月)、3頁。

序章一問題の所在一

- 3) これについては、拙著『日本近代主権と「戦争革命」』(日本評論社、2020年)を参照。
- 4) 愛国詩と戦争詩の差については、戦時下の詩が孕んでいた問題点を鋭く考察した名著『幻影解「大東亜戦争」』(葦書房、1989年)の筆者である今村冬三氏は、「戦争詩一主として支那事変の間に現れた戦争をモチーフにした詩作品」、「愛国詩一主として大東亜戦争の間に現れた戦争をモチーフにした詩作品」と区別しておられる(同書、6頁)。

だが、本稿で使用する「戦争詩」は日中戦争・大東亜戦争下における戦争を扱った詩で、反戦詩と戦場詩を除いたもの、すなわち同時期に何等かの形で戦争を支援、美化、ないし戦意を鼓舞した内容の詩という程度の意味合いである。

1. 「大東亜戦争」の翻弄

- 5) 高村光太郎「未曾有の時」(『中外商業新聞』1938年1月5日掲載<1937年12月19日作>、『高村光太郎全集』2、筑摩書房、1994年増補版)、205～206頁。
- 6) 同前、368頁。
- 7) 高村光太郎「鮮明な冬」(『改造』1942年1月)、188～189頁。
- 8) 高村光太郎「彼等を撃つ」(『文芸』1942年1月)、48頁。
- 9) 前掲『幻影解「大東亜戦争」』、254～256頁。
- 10) 三好達治「捷報臻る」(『捷報いたる』、東京スタイル社、1942年7月)、6～8頁。
- 11) 初出は『文芸』1942年2月、99～101頁。
- 12) 太宰治「十二月八日」(『婦人公論』1942年2月号掲載。本稿では『十二月八日 太宰

- 治戦時著作集』、毎日ワングズ、2012年11～12頁より引用した)。
- 13) 「巻頭言」(『中央公論』1942年1月)。
 - 14) 河上徹太郎「光栄ある日」(『文学界』1942年1月)、3頁。
 - 15) 同前、4頁。
 - 16) 河上徹太郎「新しき歴史の心」(『文学界』1942年2月)、2頁。
 - 17) 坂口安吾「真珠」(『文芸』1942年6月、『坂口安吾全集』、筑摩書房、1999年)、395頁。
 - 18) 獅子文六「あの日」(山田風太郎『同日同刻』、ちくま文庫、2006年、74～75頁より引用)。
 - 19) 高村光太郎「十二月八日の記」(『中央公論』1942年1月)、111頁。
 - 20) 「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(『中国文学』80<1942年1月>)、481頁。この宣言は匿名による執筆であるが、竹内好の手になるものと推定されている。
 - 21) 前掲太宰治「十二月八日」、8頁。
 - 22) 東畑精一「絶対戦争」(『改造』1942年1月)、154頁。
 - 23) 徳川夢声「まえがき」(『無声戦争日記』1、中央公論社、1960年)。
 - 24) 「徳川夢声戦争日記」1941年12月8日(同前)、3頁。
 - 25) 中川與一「舊體系との訣別」(『文芸』1942年1月)、20頁。
 - 26) 中野好夫「ささやかな感想」(『新潮』1942年12月)、34頁。
 - 27) 長與善郎「今次戦争とその文化的意義」(『新潮』1942年2月)、28～29頁。
 - 28) 東大十八史会編「学徒出陣の記録」(前掲『同日同刻』より引用、64頁)。
 - 29) 火野葦平「全九州文化協議会報告文」(前掲『同日同刻』より引用、76～77頁)。
 - 30) 「古川ロッパ日記」1941年12月8日条(『古川ロッパ昭和日記 戦中編 昭和16年一昭和20年』、晶文社、2007年)、160頁。
 - 31) 武者小路実篤「作家の手記」(前掲『同日同刻』より引用、90～91頁)。
 - 32) 武者小路実篤「雑感」(『文芸』1942年1月)、120頁。
 - 33) 前掲高村光太郎「鮮明な冬」。
 - 34) 亀井勝一郎「現代精神に関する覚書」(『文学界』1942年10月)、5頁
 - 35) 同前。
 - 36) 石川達三「国富としての文学」(『文芸』1942年1月)、16～17頁。
 - 37) 同前、11頁。
 - 38) 前掲河上徹太郎「光栄ある日」、4頁。
 - 39) 高村光太郎「脱却の歌」1947年11月2日(『高村光太郎全集』3)、315～316頁。同「鈍牛の言葉」(同)、369～370頁。

II. 表現者の幻覚と煩悶—「本当の自己」の渴望と探究—

- 40) 高村光太郎「激動するもの」(前掲『高村光太郎全集』2)、136～137頁。

- 41) 高村光太郎「触覚の世界」1928年11月～12月（『高村光太郎全集』5）、11～12頁。
- 42) 高村光太郎「印象主義の思想と芸術」1915年7月（『高村光太郎全集』4）、212頁。
- 43) 神保光太郎「国民詩の進撃」（『文芸』1942年2月）、90～91頁。
- 44) 高村光太郎「戦時、美を語る」（『知性』2-10<1939年10月>、『高村光太郎全集』5）、126頁。
- 45) 高村光太郎「決戦の年に志を述ぶ」（1942年12月30日作、翌1943年1月2日発行の『東京新聞』に掲載、『高村光太郎全集』3）、70～71頁、438～439頁。
- 46) 保田與重郎「私懷」（『文学界』1942年12月）、32頁。
- 47) 高村光太郎「撃ちてし止まむ」（1943年3月作、『高村光太郎全集』3）、79～80頁。
- 48) 高村光太郎「美をすてず」（1944年、同）、175～176頁、451頁。
- 49) 高村光太郎「内面的力量の問題」（『日本美術』1942年5月、『高村光太郎全集』5）、247頁。
- 50) 野口米次郎に関するもっとも包括的な研究として、堀まどか氏の大著『「二重国籍」詩人野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012年）がある。同書は、野口に関して、象徴主義への傾倒、同時代の日本詩壇との関係、アイルランドやインドナショナリズムとの交錯、など多岐にわたる重要論点に目を配っており、野口の総合的研究ともいべき重厚なものである。野口を戦争詩を量産した戦争への雷同者という断罪ですませずに、野口が抱えていたアンビバレンスと葛藤に分け入って、そこから野口の表現者としての立ち位置とそこにいたる内在的軌跡を近代にとっての意味ある精神史として描出された堀氏の論述はきわめて啓発的である。

特に、野口の属性でもあり、その精神を深く規定していた「二重国籍人」という意識と、モダニズムの一環である象徴主義への帰依が、どのように混淆し、詩人としてのあり方や、ナショナリズムへの向き合い方に影響を及ぼしたのかという点に切り込んだ点は近代の帰趨にかかわる重要な示唆を含んでおり、その知見、視点を含め、教えられることはきわめて多い。

この堀氏の包括的な分析に対して、本稿では天皇の存在原理と重ね合わせて高唱された「大東亜戦争」の理念が、野口の自我の底に渦巻く熟塊のような情念にどのように作用したのか、そしてそれへの野口の対峙のあり方が「大東亜戦争」の理念にどのように規定され、また天皇制の原理とどのように呼応したのかという点に分析を焦点化した。その結果、筆者が旧著『日本近代主権と立憲政体構想』（日本評論社、2014年）、前掲『日本近代主権と「戦争革命」』で明らかにした天皇制が標榜する理念との間に明らかな呼応関係が認められることを確認した。

ただ、他の詩人や芸術家たちとの比較検証が不十分であるだけでなく、分析の掘り下げについても多くの課題を残している。これらの点については、敗戦後への展望と合わせて、別稿を期したいと考えている。
- 51) 野口米次郎「勝利者」（『八紘頌一百篇』、富山房、1944年）、230～231頁。

- 52) 野口米次郎「屠れ米英われ等の敵だ」(同前)、119～121頁。
- 53) 野口米次郎「第二の思想」(同前)、258～260頁。
- 54) 野口米次郎「拈華微笑」(同前)、255～257頁。
- 55) 野口米次郎「心境」(同前)、172～174頁。
- 56) 前掲坂口安吾「眞珠」、395頁。
- 57) 高村光太郎「戦いにきよめらる」(『西日本新聞』1943年1月2日、『高村光太郎全集』3)、67～68頁
- 58) 高村光太郎「みなもとに帰るもの」(『東京日日新聞』1942年11月27日、『全集』3)、58頁。
- 59) 高村光太郎「大決戦の日に入る」(『婦人之友』12月1日、1943年12月、『全集』3)、135頁
- 60) 今村冬三『幻影解「大東亜戦争」—戦争に向き合わされた詩人たち—』(葦書房、1989年)。

Ⅲ. 擬態としての「連帯感」の共有と「国民文学」の流産

- 61) 宮地正人『日露戦後政治史の研究』(東京大学出版会、1973年)は、この点を分析した古典的研究である。
- 62) 竹内好執筆(推定)「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(『中国文学』80<1942年1月>)、482～483頁。
- 63) 東畑精一「絶対戦争」(『改造』1942年1月)、154頁。
- 64) 加藤武雄「大東亜文学者会議<発会式11月3日～5日帝国劇場>での発言」(『文芸』1942年12月)、40頁。
- 65) 豊島興志雄「文化的構想」(『中央公論』1942年1月)、114頁。
- 66) 平生鈺三郎「戦時経済の完遂」(『改造』、1942年1月)、158頁。
- 67) 島木健作「十二月八日」(『文芸』1942年1月)、24～25頁。
- 68) 西谷啓治「新しき人間の形成—大東亜圏に於ける倫理の問題—」(『改造』1942年4月)、8～9頁。
- 69) 伊藤整「日記」1941年12月8日(『太平洋戦争日記』(一)、新潮社、1983年)、11頁。
- 70) 伊藤整「十二月八日の日の記録」(『昭和戦争文学全集4 太平洋開戦—12月8日—』、集英社、1964年、213～214頁から引用)。
- 71) 「青野季吉日記」12月8日(『青野季吉日記』、河出書房新社、1964年)、123～124頁。
- 72) 河上徹太郎「光栄ある日」(『文学界』1942年1月)、3頁。
- 73) 同前。
- 74) 同前。

- 75) 同前、5頁。
- 76) 同前、4頁。
- 77) 同前。
- 78) 徳川夢声「日記」1942年5月8日（『無声戦争日記』1、中央公論社、1960年）、78～79頁。
- 79) 徳川夢声《懺悔録より》（同前）、112～113頁。
- 80) 山田風太郎「日記」1945年10月1日条（『新装版 戦中派不戦日記』、講談社文庫、2002年）、540～541頁。
- 81) 徳富蘇峰『宣戦の大詔』（東京日日新聞社、1942年）、2頁。

むすびにかえて

- 82) 拙著『日本近代主権と立憲政体構想』（日本評論社、2014年）、同『日本近代主権と「戦争革命」』（日本評論社、2020年）を参照。

